
淡い記憶

そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

淡い記憶

【Nコード】

N0293Q

【作者名】

そら

【あらすじ】

別のところで書こうと思います。

詳しくは活動報告に書いています。

序章

視界いっぱい広がる蒼い空。
流れる紅い紅い血。

ぴくりとも動かない四肢。

唯一動いてくれる頭を懸命に動かし、ゆるゆると辺りを見渡した。
そこで、ようやく自分の置かれている状況が分かった。
落ちたのだ。

剣道部の合宿の帰り、自分達を乗せたバスが、すぐそばにある切り
立った崖から。

他の仲間とは、思い至り、段々と動かなくなってきた頭に叱咤し、
再び辺りを見渡す。そして、やっと確認できた仲間達の姿に愕然と
した。

一目で自分より酷い状態で横たわる仲間達の姿。中には既に手遅れ
の者もいるかもしれない。

「……っ………あ」

何かを言いたくても口から出てくるのは音になりきれなかった空気
ばかり。

唯一、意識があるのに、何もできない自分の脆い身体が憎たらしく
なる。

悔しさで唇をきつく噛み締める。

じわりと血の味が口の中で広がった。

「………やめてください。これ以上、傷を増やさないでくだ
さい」

悲しげだが、怒りを含んだ声が唐突に聞こえた。

「………とうとう、幻聴まで聞こえてきたのかな。」

こんな、知る人ぞ知るといった場所で人と会う訳がないと思い、そ
う結論づけた。

だけど、自分の傍には確かに人の気配がある。

それはどこか懐かしく、温かい。

その気配は自分の傍に腰をおろした。

そして、驚くことにその気配以外にも複数の人の気配を感じた。

「やめろ！！ 死ぬ気か！」

「そうよ！ いくら治癒力の高い貴女でも、全員を治すなんて、ただでは済まないことよ！」

その気配の仲間達らしい者は、必死に自分の傍にいる者に声を投げ掛ける。

しかし、その気配は仲間達の言葉など余所に、自分の傷口に手を当てた。

途端、温かい、形容しがたい何かに包まれた。

「私は、もう二度と、大切な人を目の前で失いたくないの」

ぼつりと漏らされた、誰かに訴えるようなその言葉は、自分の中にずとんと落ちた

目を動かし、朧げてきた視界の中で、その姿を捉えた。

そこには、桜を連想させる白髪 of 鬼の姿があった。

序章（後書き）

転生ものが好きすぎて思わず書いてしまった作品です・・・
これも、オリジナルと同じく、その場の勢いで書いてます・・・

第一話

放課後のチャイムが鳴り、他クラスの生徒が顔を覗かせたり、さつさと帰宅する者もいる。

休み時間以上の賑わいを見せる廊下を平助は小走りで進んだ。

目的の「2-A」の教室のに着き、扉を開けた。

「総司ー、部活行こうぜ」

空をぼんやりと眺めていた沖田は、ゆるゆると平助の方を見た。

「なんだ、もう来たんだ」

「せっかく来てやったのに、そんな言い草はないって。ほら、早くしねえと土方さんが角生やして迎えにくるぜ」

「あ、それ、面白そうかも」

「面白そうって……」

平助はガクツと肩を落とし、うなだれた。

最近、沖田は以前よりも部活に来なくなった。そのせいで、学年は違うが、教室が一番近い平助が沖田を迎えに行く事になった。

連れて行かなかったら、鬼顧問の雷が落ちる場面を見ることになるだろう。……まったくもって、迷惑極まりない。

なんで、総司と同じ学年の一君が迎え係じゃないんだよ、と毒づきながら、沖田の席に歩み寄る。

「ほら、行くぜ。ただでさえ、一ヶ月も入院してたんだから、体が鈍ってるだろ」

「……退院してから、体動かしてるよ。ちゃんと」

「それでも大会がもう少しであるんだから来いって」

諦めようとせず、あの手この手でなんとか説得しようとする平助を横目で見やり、気づかれない程度に小さく息をついた。

別に、行きたくないわけではない。逆に、行って、おもう存分暴れまくりたいくらいだ。なのに、自身の気持ちは部活に行く事を拒んでしまう。

自身でも自制できなくなってしまうた、訳の分からない気持ちを抱え始めたのはあの事故に遭ってからだ。

二ヶ月前の合宿の帰り道、剣道部の部員全員を乗せたバスは、ブレーキの故障により、百メートルを越える崖から落下した。

その時、その場にいた全員が死を覚悟した。

だが、目覚めた時、自分達は病院にいた。しかも、擦り傷や打ち傷があつたものの、全員、無傷という、奇跡的な状態だったのだ。

その事に、医者や警察は有り得ないと思つた。

百メートル以上の場所から落下した、という事はもちろん、落下したその場所には、ぺしゃんこという言葉がしつかりくるバスの姿とバスの中やその周辺にできた大小多くの血溜まりがあつたのだ。

彼らのものではないなら、一体誰のものなのだろうか。

謎が数多くある事故だったが、死を覚悟した彼らにとって、今、生きていく喜びの方が強くて、その事はどうでもいい事であつた――
――沖田以外は。

ただ一人、彼だけは、自身の傷が治っていたことに対して言い表せない何かを感じていた。

あの時、ほんの少しだけ意識を取り戻した沖田は、瀕死という言葉が相応しい彼らの姿を見た。

そして、それと同時に思い浮かぶ、脳裏に焼き付いて離れない、儚いながらも、凜とした鬼の姿。

顔はあまり見えなかったが、額から生えた二本の角に紅い瞳と白い髪は鮮明に覚えている。

よく思い出してみると、あの鬼は少女の姿をしていた。

このことを百人中百人が夢か幻かと答えるだろう。しかし、そう答えるにはあまりにも鮮明な記憶と段々と迫ってくる死の恐怖が苦々しく残っていた。

はたして、あれは刻々と近づいてくる死の恐怖が創りだした幻影だったのだろうか。そして、あの時、自分を包み込みような温かいものはなんだったのだろうか。

「ねえ、平助君。君さ、あの時、変な感じがしなかった？」

「な、なんだよ。突然」

説得の言葉を並びに並び立てていた平助は、今まで黙り込んでいた沖田からの唐突すぎる質問に驚きつつ、あの時の事を思い出す素振りを見せる。

「あつた！あつた！なんかあつたけーもんに包みこまれた感じがした！」

平助の言葉に小さく目を開いた。

やはり、自分だけではなく、他の者も感じていたのだ。

「そんなことより！総司、いい加減行こうぜ」

「平助の言う通りだ。さつさと来い、総司」

「そうそう、さつさと来……。って、一君!？」

いつの間にか平助の隣に立っていた斉藤は、防具を身につけた姿で、部活がとづくに始まっていることに気づき、平助の顔から血の気が引いた。

「は、一君、ひ、土方さんのご様子は……………」

「素振り五百回、運動場百周、道場の掃除一ヶ月分（一人で）のことを仰せつかった」

機嫌急降下中なんですネ……。

泣き叫びたい気持ちを抱えながら、沖田の事を斉藤に任せ、教室を出ていった。

平助が出ていった事により、わずかながらにできた沈黙を先に破ったのは、意外にも沖田だった。

「もう一君を駆り出すなんて、土方さん、本当、卑怯だよね」

「総司」

沖田の言葉を見せず、一枚のプリントを目の前に差し出した。

いきなり目の前に差し出された事に僅かに眉を寄せ、それを受け取る。

「これって、次の大会の？」

プリントには次の大会の日時や場所といったものが記されていた。

空いた場所には、誰が書いたか一目瞭然の自分宛のメッセージが荒々しく書かれてあった。

「それには、剣道部員が全員出場する事になっている。練習には来なくとも、それには必ず来い」

それだけ言つと、斉藤は教室を出ていった。

たった一人だけになった教室には夕日が差し込み、全体を紅く染める。

窓から入ってきた秋風が持っていたプリントを小さく揺らす。

ずっと手に持っていたせいか、少し皺がついたプリントを再び広げる。何かを考えるように顎を手の平にのせ、そこに記された場所をぽつりと呟いた。

「“鬼桜学園”、かーーーーー」

第二話

私立鬼桜学園は、小・中・高一貫のエスカレーター式の二十年程前にできたばかりの新校である。

通う者の大半が何かしらの才能を持っている。つまり、エリートと呼ばれる者ばかりがこの学園に集っているのだ。

それに合わせてか、子供には行き過ぎると思える程の最新設備が整えられており、中等部からは全寮制といった事に対しての配慮からか、映画館などといった娯楽施設が多数存在している。

そういった娯楽施設などを運営しているのは、大人ではなく、なんとそこに通う生徒によって運営されているのだ。

こういった極めて珍しいシステムなどによって、創設二十余年程度にも関わらず、全国に有名校として名が知れ渡っており、場所が山脈の中という、外界から切り離されたような所にも関わらず、全国からの入学希望者があとをたたないのだ。

そして、名が知れ渡っている理由は、もう一つある。

鬼桜学園には形こそは同じだが、黒と白といった、色違いの二タイプの制服が存在している。

黒の制服は学園の一般的な制服である。そして、白の制服はエリートばかりが集う学園の中でもエリート中のエリートといった、莫大な生徒数を誇る学園の中でもほんの一握りの者しか着れない代物である。

白の制服を身につけたほとんどの生徒が人並はずれた身体能力と頭脳を持ち、多大な成績を残している。

この特殊な形式も、名が全国に知れ渡っている一つの要因だろう。

そんな白の制服の生徒でも、やはり、上には上がいる。

莫大な生徒数を誇る鬼桜は、生徒だけの世界といっても過言ではない。

そんな莫大な数の生徒を取り締まるのがほんの数人で形成された生

徒会だ。

生徒会の者には、各専用の部屋が用意されている

丁度太陽が真上に差し掛かる頃、書記専用の部屋に小柄な少女――千鶴の姿があった。

千鶴は設備されているベットに寝転がっており、まだ頭が覚醒してないのか、ぼんやりと無駄に高い天井を見つめていた。

白を基調とした部屋は、太陽の光を反射し、かなり眩しい。腕で目を隠し、光を遮る。

その一つ一つの動作はどことなく重い。

千鶴は段々と覚醒してきた頭で今の自身の状態を確認すると同時に、バツと起き上がった。

「い、今何時!?!」

慌てて腕時計を確認すると、もとから青白かった顔がますます白みを帯びた。

今の時間は午後十二時十三分。あと二分で午前中の授業が終わる事を告げる。

朝、学校に早く来過ぎたせいで、かなり時間を持て余す事になったので、この部屋で暇つぶし程度にほんの少しの間だけ勉強するつもりが、どうやらそのまま寝てしまったらしい。

そこまでは覚えている。だが、ベットに移動した記憶はまったくない。

「無意識の内に移動したのかな……?」

「そんな訳ないだろ。俺がやったんだよ」

「か、薫!?!」

どこか人を小馬鹿にしたような言葉を紡ぐ、自分とまったく同じ顔をした少年――薫を見て、先程とは別の意味で血の気が引いた。

「い、いつの間に……」

「ついさっき。――それより」

一旦言葉を切り、スッと目を細めた。千鶴はそれに顔を引き攣らせ、数歩後退した。

「俺、何度も言ったよね？　少しでも、体調が悪そうな素振りを見せたら」

口元で見せるのは冷笑。悪魔の笑みと思えるのは自分だけではないだろう。

少しずつだが、着実に近づいてくる薫の背に何かドス黒いものが見える。

「強制的に眠らせるって」

その日、最上の笑顔と思われるものを浮かべる薫に千鶴は何かを言おうと口を開くがそれを許さないと言わんばかりに、薫は言葉を紡いだ。

「『眠れ』」

その途端、千鶴の身体は前へと倒れる。

それをすぐ目の前まで近づいていた薫が抱き留める。

そのまま横抱きにし、千鶴の表情を見て、顔を歪めた。

汗が吹き出し、何かの苦痛に耐えるような表情は、見ている方まで辛くなる。

千鶴がこうなり始めたのは約一ヶ月前。学園より、ずっと奥にある山の中で起こった転落事故が原因だ

薫や千鶴は鬼という、人間ではない存在だ。

鬼には、特殊な能力が一人一人に存在している。

千鶴は人の怪我を癒す事ができる、治癒能力を持っていた。

しかし、治癒能力といっても怪我そのものを無くするような便利なものではない。千鶴が持つ治癒能力は、その怪我を自分に移すという力だ。つまり、怪我をした者の身代わりになるような能力なのだ。

鬼は自身の治癒力が人と比べて非常に高い。その中でも、千鶴は別格だった。だから、多少の傷や怪我を治すのはたいした事ではなかった。

しかし、今回の件は別だ。

あの事故で負傷した者は十数に及ぶ。そのほとんどが瀕死に等しい状態だった。

なのに、その全員を彼女は治しきつたのだ。

移した怪我は多少の時間がかかったが、すぐに治る。しかし、移す時に伴う痛みは残るのだ。

十数に及ぶ、瀕死の傷の痛みは想像を軽く超える。

千鶴は一人治す度に死を垣間見ていただろう。その度に彼女は唇をきつく噛み締め、遠くなりそうだった気を留めていた。

一ヶ月たった今でも、痛みによる後遺症は凄まじく、立っているのもやっとなはずだ。

薫は千鶴をベットに降ろし、苦痛に歪む表情を見ながら、怒気を含んだ声で呟いた。

「・・・・・・・・新選組」

それは、“前世”の千鶴にとって、関わりが深いものだった。

千鶴や薫には、今の記憶とは違う、別の記憶がある。

その中に、歴史上に今もなお、名を残す、彼にとって忌々しい存在――それが新選組だ。

そして今回、千鶴が治した人間がその幹部を務めていた者達の生まれ変わりだった。

実質、彼らを恨むのはまったくの検討違いなのだが、前世の事を含めて、恨まずにはいられない。

「何そんなに苛ついてるのよ」

「・・・・・・・・千」

どこか呆れた様子で入って来た千は、千鶴の様子を見て顔を歪ませた。

「・・・・・・・・まだ、本調子じゃないのね」

「当たり前だろ。・・・・・・・・それより、何？」

千、薫、千鶴は生徒会役員である。役員には一人につき一室、専用の部屋が設けられている。

それらは同じ建物内にあるが、建物自体が常識を考えていないとは思えない程、広く大きい。そして、この場所と会計専用の千の部屋は一番離れており、移動するのが億劫な程だ。

「それはもちろん、千鶴ちゃんの生存確認と午後の授業が始まるから薫呼びに。それと……」

「何？」

何か言いにくそうに口を開閉し、目を薫から逸らす。何かをブツブツと呟いた後、意を決したように頷き、口を開いた。

「薫、落ち着いて聞いて。今度うちの学校、スポーツの大会があるでしょう？」

「ああ、あのすつごく面倒くさい奴だろ」

鬼桜は年に何回かのイベントが催す。その内の一つがスポーツ大会だ。

スポーツ大会といっても、規模が違う。

鬼桜には様々な才能を持つ者が集まる。趣味的な才能や学力、運動面といったりと、多種多様なものがある。学力、運動面で通う者は膨大な生徒数の中では最もメジャーな存在だ。

そんな数多くの運動面に秀でている者達、つまりいずれは日本代表を務めてしまってもおかしくない者達を中心とする大会だ。規模は自然と大きくなり、最終的には校内だけではとどまらず、他校も参加が出来るようになったのだ。日本を代表する選手と手合わせできるという事で、多くの学校がこぞとばかりにエントリーしてきたのだ。

そして今年は例年より遥かに多い学校がエントリーしてきたため、この大会は四日間続けられる。

そして、その大会の運営は生徒会が担う。まったくもって、迷惑な話である。

「それがどうかした？」

「さつき、仕事をしていた時に剣道部のエントリー表をたまたま見たの。その中に薄桜学園の」

そこで、千の言葉が切れた。

千の目の前には、不気味な程につこりと笑う少年の姿があった。薄桜学園。そこにはあの新選組の生まれ変わりが通う場所。

そして、その全員は剣道部に属している。

「へえ、あいつら、ここに来るんだ……」

「……お願いだから、挑発とかしないでよ」

薫、千、千鶴は、剣道部に属している。千と千鶴はマネージャーとしてだが。

なので、大会の時には自然と当たる可能性が高い。彼らに嫌悪感を抱いている薫は、彼らに何かしらの事を絶対するだろう。

「大丈夫。あまりたいした事はしないよ」

千の気持ちを読み取ったのか、愉快そうに言う。

「絶対にやめて。……それに、今の彼らにあたっても無駄でしょ？」

千は目を伏せ、千鶴を見た。

「だって彼らは、前の記憶を持っていないもの……」

「そんな事は分かっている。単なる冗談だよ」

嘘だ。さっきの顔は絶対に本気だった。

軽い頭痛がするまま、私は先に戻るから、と扉の方に向かう。ふと、何かを思い出したのか、立ち止まった。

「そうだ、これ渡すのを忘れてたわ」

薫の手に一枚のプリントを渡し、もう少しで午後の授業が始まるので走って戻っていった。

渡されたプリントを何気なく見た薫は、一瞬目を見開き、すぐに面白そうに口元に笑みを浮かべた。

「あいつらが数人逃げた、か」

第二話（後書き）

色々と直しました。

こう見ると一話書く度に文が短くなっていつてますね。

ちなみに、句読点の書き足しがほとんどなので、内容は変わってありません。

第三話

ふと、遠くの方を見てみると、色が青から紅色に変わり始めた秋の山々が広がる。

そして、近くに視線を戻すと、ヨーロッパの国々に迷い込んでしまったかのような街並み。

そう、街並み。

映画館、図書館、美術館、ショッピングモールなどなど。果てには遊園地なんてものまである事に関しては幻覚で済みたい。

ここで一言、言わせてもらいたい。

ここは私立鬼桜学園。

つまり、ここは学校なのだ。

なのに、都会並の娯楽施設が揃っており、どこぞの街と同じくらいの広さがあるのはどういう事なのだろうか。

そこに何も知らない人が入ってしまえば、すぐに迷ってしまうだろう。

藤堂平助は今、そんな状況下のもとにいた。

「本気でここ、何処なんだよ……」

右を見ても左を見ても、レンガ造りの似たような建物ばかりで、方向感覚を失ってしまう。

今日、平助は大会のためにここに来た。

しかも、その大会は大規模という事もあり、長引くため、学園側から、参加者全員に対して宿泊場所が用意されているのだ。

そこに（バスで）案内され、自分達の出場時間以外は自由に学園内を歩いてもいいと言われたので、平助は自身の好奇心を抑え切れず、外に出たのだ。……原田から「迷うなよ」と忠告を受けながら。

剣道部の試合が始まるのは午後四時半。時間を確かめたいにしても、肝心の携帯電話は充電切れ。そして、周りには時計のようなものは

一切ない。今の所、平助には時間を確かめる術は何一つないのだ。時間内に戻らなければ、鬼顧問からは怒号が飛び、前回の何倍もの罰が課せられ、知り合い教師二人からはとことんからかわれ、一ツ年上の黒髪と同僚からは冷たい視線を浴びせられ、この大会に渋々ついて来た猫目野郎からはいい暇潰しを見つけたと言わんばかりに精神的言葉が浴びせられるだろう。

そして、相手は初戦から日本の中でも五本の指の中に入る実力を持つ、鬼桜学園なのだ。平助自身もそこ戦いたくて来たようなものなのだ。遅刻して自分だけ出場は無理でした、というようなオチは絶対に避けたい。

こんな時に限って充電が切れている携帯電話を恨めしく思いながら、息を吐いた。

「なんでこんな時に限って……」

「……あの……あの」

「そもそも、なんでここ、こんなに広いんだよ」

「……あのっ！」

「しかも、なんか、どこも似たような感じだしさ……」

「すいません！ 私の言葉聞こえていますか！？」

「あーもー！ 誰だよ、こんな忙しい時にさ！」

八つ当たり半分で後ろを振り向く。そこには、黒い髪を上の方でまとめ、白い制服を着た平助と同じくらいの少女が心配そうに平助を見ていた。

平助は少女の顔を見て、ピシッと固まった。

少女は顔立ちがよく、美少女の部類に入る。

この学園は顔立ちが良い者が比較的に多いが、この少女は別格といえる。

少女は平助の顔を見ると、目を見開き、どこか悲しそうに顔を歪める。

だが、それは一瞬の事。少女はすぐに平助に微笑みを向ける。

「大丈夫ですか？ ご気分が優れないようでしたら、医務室に案内

いたしますが・・・」

「あ、そうだ！ おまえ、ここの生徒だよな？ 少しいいか？」
少女は目を瞬き、小さく頷く。

「はい、大丈夫ですが・・・」

「じゃあ俺を剣道部の会場まで連れて行ってくれねえか！？」
手を合わせ、懇願する。

頼みである少女はキョトン、とした後、小さく笑いだした。

「な、なんだよ・・・」

「い、いえ。すみません。昔の知り合いにそっくりな事をなさるので・・・」

まだ笑いの余韻が残っているのか、小さく笑いながらも、「お気に障ってしまったら、すいません」と少女は素直に謝る。そして、平助に小さく微笑む。

「私も同じ会場に向かっている途中なんです。よかったら一緒に行きませんか？」

「本当か！？ 助かるよ！」

体全体で喜びを表す平助に少女は静かに微笑んだ。

「剣道部の会場はここです」

平助は少女に案内され、会場が数分で着くような場所にあった事に胸を撫で下ろす。

少女が指す、会場は和風を重視した造りになっている。周りのヨーロッパ風の街並みとはバランスが悪そうに思えるが、これが意外ととれているのが不思議なところだ。

そして、予想はしていたが。

「やっぱり、かなりでかいんだな・・・」

自分の学校の体育館の二倍の広さは優に超していると思われるくらい、広い。

ぼそりと呟く平助の隣で何故か少女は恥ずかしそうに俯いた。

「なににせよ、着いてよかった！ 本当にありがとうな！」

平助は笑顔で感謝の気持ちを言った後、まだ言っていない事が一つある事に気づいた。

「そういや、まだ名前聞いてなかったよな？ 俺は藤堂平助」

おまえは、と少女の名前を聞こうとした時だった。

「おい、平助ー！ おまえ、帰ってくんの遅いと思ってたら、先来てたのかよ」

遠くの方で、自分の名前を呼ぶ、原田の姿が見える。どうやら自分は向こうより先に着いてしまっていたらしい。

怒られる事はこれでなくなった、と思い、安心する。

「あ、わりー。で、おまえのーーーって、あれ？」

少女を放ったらかしにしている事に気づき少女の方に向く。

しかし、少女の姿はどこにもなかった。

もともと、少女もここに来る予定のようだったので、きっと、もう中に入ってしまったのだろうと平助は思った。

平助がこれから始まる大会に向けての用意のため、原田達のもとに向かった。

ーーーーー 防具や竹刀など、その他諸々を宿泊場所に忘れた事に気づき、結局予想していた事が起こってしまうのは数秒後の話。

沖田は偶々見た、平助とともにいた少女の事を思い出す。

自分以外の全員は平助が壁になっていた事で気付いていなかったようだ、一歩後ろを歩いていた自分にはそれがよく見えた。

少女は何故か自分達を見て、安心したような、懐かしむような、ーーーーー 悲しそうな、そんな様々な感情を入り混ぜた、なんとも言えない顔をしていた。

そして、少女は自分を見た瞬間、少女の頬から一筋の涙が流れたの

だ。

それは、今まで耐えてきたものの一部が出てしまった、といった感じだった。

少女はすぐにその場を離れてしまった。

沖田はその姿をただただ、見ていた。

頭の端で、何かが引つ掛かる感じを覚えながら――――。

剣道部の会場に使われる建物は、普段は武道の部活の生徒達によって頻繁に使われる。

余談だが、この建物は薫が生徒会に任命されてすぐの頃に生徒会の権限がフルに使われ、薫によって建てられたのだ。

書記程度ではさしてそういった権限はないが、薫の本当の性格を知っている者ならば、どうやって許可が下りたのか、すぐに想像がつく。

その中には（何故か）小さな日本庭園があり、部活で疲れた生徒達の憩いの場とされている。

そこに、少女――千鶴はいた。

今が試合の最中という事もあり、庭園内には少女以外は誰もいない。少女はうるさく鳴る心臓を鎮めながら、木にもたれかかる。

「なん………で」

腕で目を隠す。そこからは何筋もの涙が零れおちる。

真っ白な制服に点々と染みが作られていく。

足音が聞こえ、涙を慌てて手の甲で拭い、その方向を見る。

「………お千ちゃん………」

「あの人達に会ったんだね」

疑問ではなくて肯定。

確認するような言い方をする千に誤魔化しの言葉を並べても効かな

いだろう。

千鶴は小さく頷き、それを認める。

千は目を伏せ、小さく「そう」と呟くと空気を一転させるように笑った。

「そろそろ試合見に行きましょう！ 薫ったら、千鶴ちゃんが来ないから、出ないとか言い始めて大変なんだから！ 先輩達が抑えている間に早く薫に顔、見せましょう」

「う、うん」

確かに、薫ならやりかねない。

今、薫を抑えるのに奮闘しているであろう剣道部の先輩達に心の中で謝りながら、千鶴はさしのばされた千の手を握り立ちあがった。

剣道の大会が開催される建物より東に少し行った所に小さな林がある。

普段はあまり人氣がなく、物静かな林に数人の男女がいた。

九割が生徒の学園にも関わらず、そこにいた男女はどうみても三代を過ぎた大人ばかりだった。

男女はどこか疲れ切ったような顔で円になるよう座っていた。

突然、一人の女性が胸元を握り締め、苦しみだした。

そして、それにつられるかのように周りにいた男女も一斉に彼女のように苦しみだす。

彼らの髪は白く染まっていき、眼は日本人特有の黒から血のような紅に変わる。

彼らは疲れていた事を忘れ、まるで狂ったかのように笑いだした。それには、自我というものは一切感じられない。

男女はそのまま歩きだす。

その方向は、西。

つまり、今から剣道の大会を始める建物がある方角だった。

第三話（後書き）

なんとなーく、分かりづらい・・・

千や平助ってこんな口調でしたっけ？

なんだか、沖千のはずが平千になりましたね。

感想お待ちしております。

そらに書く源を！

第四話

緊迫した空気が会場内を包む。

その空気を作り上げているのは竹刀を持って向かい合っている小柄な少年と長身の少年の二人。

二人は気迫でお互いを牽制し合う。その二人の無言の牽制に会場全体が吞まれたのだ。……まだ始まっていないのにも関わらず。

その空気に吞まれた内の一人である千鶴は、祈るように組んでいた手に力を入れる。

「薫、すごい気迫……相手の人も……」

千鶴の感嘆とした呟きに千が呆れ口調で返した。

「そう？ 私には嫌悪感をぶつけ合ってるようにしか見えないんだけど」

対戦相手の正体と薫の相性を知っている千には、二人の（心の中の）罵り合いが聞こえてくる。

とてもじゃないが、他の見物者のように、緊迫した面持ちでこの試合を見守る事ができない。

一方、薫の対戦相手の正体を知らない千鶴にとっては、この試合は手に汗握るものなのだろう。

試合が始まる事を告げる笛が鳴った。

その次の瞬間、二人は同時に床を蹴り、竹刀を交えた。

沖田は対戦表を見た時から相手に対して嫌悪感を覚えていた。

そこには、『南雲薫』と、一見、女だと思われる名前が書かれていた。

会ってもいない相手に嫌悪感を覚えるのは自身でもおかしい事だと

思ったので、それは気のせいという事で済ませた。

しかし、今日になるまで忘れていた嫌悪感が相手に会った瞬間に倍以上に膨れ上がった。

それは、相手も同じだったようだ。

面の下から一瞬見えた彼の顔には、悪意しか感じられない笑顔が作られていた。

しかも、嫌悪感という名の牽制を一気にこちらに浴びせてきたのだ。正直、ここまで人に対して、ボロボロにしてやりたいと思ったのは初めてだった。

「……………ねえ」

牽制し合っている中、薫の方からふいに声をかけてきた。

「俺、今日を心待ちにしてたんだよね」

「……………ふーん」

「もう一度、大っ嫌いな奴を倒せれるチャンスが巡ってきたからね」

「……………僕、君に会った事ないし、試合に負けた事ないけど」

「今のおまえならそう思うだろうね。その方が俺も助かるし」

「……………?」

意味が分からないと顔をしかめる沖田に薫は肩を竦め、窓の外を真剣な面持ちで一瞬、見る。

「いたぶりながら倒したい所だけど、そうもいかないようだね」

独り言のように小さく呟かれ言葉は、沖田の耳に入ったが、その意味を聞く前に試合を告げる笛が鳴り響いた。

試合中、最初に『それ』に気づいたのは千だった。

「千鶴ちゃん……………これ」

両者一步引かない戦いを熱心に見守っていた千鶴は千に服を小さく引つ張られ事で、千が指している『それ』に気づいた。

「『彼ら』がここに向かってきてる……………!?!」

それならば、今の状態は非常にまずい。

会場内には百を超える人の数。その中には、学園外の者が大勢いるのだ。

『彼ら』がここに来てしまったら、戦闘は免れないだろう。

なにより、『彼ら』を他の人、しかも外部の者に知られてはいけな
いのだ。

自分達が気づいたという事は薫はとっくに気づいているはずだ。

自分達の中で『彼ら』の気配に鋭いのは風間に次いで薫なのだ。

しかし、気づいているはずなのに、何の行動もおこさない所を見ると、『戦闘』を始めるための『下準備』は千鶴と千に任せたと、
う事を意味している。

千鶴と千は小さく頷き合う。

今、千鶴と千は会場の二階の吹き抜けになっっている場所にいる。

千鶴は落下防止の為に設置されている柵を越え、音をたてずに下に
着地した。

それに審判を務める少年がぎょつとした。

「ち、千鶴さん！ 試合中に降りて来られては困ります！」

「すみません。しかし、緊急事態なんです！ 今すぐ観客者全員と
試合参加者の避難を。誘導は私が行いますので」

「で、でも……」

少年は躊躇ね色を見せながら、今だ続く試合を見る。

まだ何も始まっていないのに、緊急事態と言われても、戸惑うだけ
だろう。

「早く……！」

「わ、分かりました」

千鶴の強い語気に押され、試合終了を告げる笛を鳴らした。

千は一通りそれを見て、誘導に関しては千鶴に任して大丈夫だろう
と思った。

そして、自分の手元を見る。

手を握り、小さく力を入れる。

再び開くと、そこには二匹の黒揚羽蝶がいた。

これは、情報を伝えられる手段としてよく使われる、千の能力の一つだ。

千達は今時の高校生にしては携帯電話といった、便利なものを持っていない。

なので、この黒揚羽蝶は仲間内では重宝されているのだ。

黒揚羽蝶には電話のような機能はなく、録音機能しか持っていない。千は黒揚羽蝶に向かって口を開く。

「今、剣道の試合をしている会場で先日、脱走した『彼ら』――
――『羅刹』が向かって来ているわ。至急応援を」

蝶は千の言葉に呼応するように一つ、羽を動かすと、千が望む二人の人物に知らせるためにふわりと舞い上がった。

第四話（後書き）

薫と沖田が戦うシーン、書くつもりでしたが、ぐだぐだになってしまったため、やめました（笑）

感想、お待ちしております。
そらに書く源を！！

第五話

あんなにも人で賑わっていた会場は、今では千と薫しかない。

千鶴は観客の避難に手こずっているのか、未だに帰って来ていない。

「やっぱり、誰もいなくなると寂しいわね。ここ」

「そうだな」

「そういえば、千鶴ちゃん、遅いわね」

「そうだな」

「……………何、イラついてんのよ」

「別にイラついてなんかいない」

「どこからどう見てもイラついてるようにしか見えないけど。……」

「……………どうせ、沖田さんと最後まで戦えなかった事でしょうけど」

「……………」

返答なし。その代わり、肩が少し動いたが。

千は眉間をおさえ、小さく唸る。

分かりやすい。分かりやすすぎる。

一見、ややこしそうな性格を持っている感じがしまうが、案外、学園一分かりやすいと思われる彼の双子の妹より分かりやすい性格をしているのかもしれない。

黒いオーラを出しながら、不機嫌全開の薫の横に立つのは、なんとも居心地が悪い。

千は、もう少しで来るであろう『彼ら』に合掌した。

きっと、今の薫は半殺し……………もしくはそれ以上の事を『

彼ら』にしかねない。

千は薫とまったく同じ顔をしながら、性格も態度も雰囲気も、彼と正反対な少女の事を恋しく思う。

本日何度目か分からないため息をついた時、遠くから足音が聞こえてきた。

「あ、千鶴ちゃーん！ーん！ーん！」

その言葉に薫が反応し、機嫌が直っていくのが分かる。

「……………単純だ。」

だが、千鶴が大事そうに抱えている物を見て、再び機嫌が急降下していく。

「遅くなっちゃってごめんね」

「ううん。大丈夫。……………それより、さ」

「？　どうしたの？」

「どうして、『それ』を持ってきたの？」

千は千鶴が手に抱えている、『それ』を指差す。

千鶴は手に抱えている『それ』……………小太刀を見る。

「あ、これ？　これがあれば私でも」

「ダメに決まっているだろ」

千鶴が全てを言う前に口を挟む。

「私、まだ何も言っていないけど……………」

「どうせ、それを使って、戦いに参加するつもりだったんだろ」

「……………」

凶星だ。

反論する言葉も見つからず、千鶴は押し黙る。

そんな千鶴に薫は畳み掛けるように続けた。

「そもそも、未だに具合悪くて四六時中寝てる奴が何言ってるんだ。

俺は可愛い妹にそんな事させる程鬼じゃ」

「薫！　千鶴ちゃん！」

二人は、千が険しい顔で睨んでいる扉を振り返る。

それと同時に扉は金属音のような何かが当たる音とともに一部がへこむ。

それは一つではない。

連続で外にいる彼らは衝撃を加え続け、とうとう立っていられなくなった扉はゆっくりと倒れる。

「……………五人。意外と多いわね」

扉があつた場所から入ってくる、五人の羅刹。

その口元に浮かぶのは狂喜の笑み。

「千鶴、下がってろ」

「で、でも……」

「でもじゃない!!」

有無を言わせない空気。

千鶴は唇を噛み締め、後ろに下がった。

会場内に二つしかない出入り口の一つの前に千鶴は座っていた。

目の前で繰り広げられる戦闘を一人、見守る。

千は目の前から襲ってきた男の羅刹の肩を使い、一つ飛び、膝を相手の鼻頭に向けて入れる。そして、そのままその羅刹に置いた手を軸にし、後ろから迫って来ていた羅刹に回し蹴りを当てる。

千は元々ある鬼の高い身体能力に加え、武術が同世代の中で一番だ。そして、千のすぐ隣で戦う薫は自身が持つ『言霊』の力を使い、物に宿る魂を自在に操っている。

二人は自分の能力を最大限に使い、羅刹を倒していく。

それに比べて自分はどうかだろう。

自分が持つ能力は治癒の能力。

聞こえはいいが、その能力が持つリスクは高い。

千鶴が持つ治癒能力は傷を『なかった』事にするのではない。その傷を自分の身に移し、自身の治癒能力でそれを治すのだ。

いざ戦闘、という時には何の役にも立たない。

千鶴には千のような武術センスもなく、戦闘向きの能力もない。いつも守られているだけの自分の無力さに悔しさがこみ上げる。

小太刀を握り締め、千鶴は顔を伏せた。

そのせいで、自分に下りた影に気づかなかった。

千鶴はいつの間にか宙を舞っていた。

何が起こったのか分からない。

一瞬、視界の端で捉えた白い髪の子――羅刹だ。

書類には、脱走した羅刹の人数が書かれていなかった。だから、先程襲撃してきた羅刹が全てだと思っていた。

しかし、脱走した羅刹は五人ではなかったのだ。

千鶴は床に叩きつけられるように落ち、その衝撃に口の端から血が流れる。

その時に頭を打ってしまい、視界が霞む。

霞む視界の中、それに気付いた千と薫が、顔色を変えてこちらに向かってくるのが見えた。

しかし、千鶴に迫ってくる男の方が近く、どう考えても間に合わない。

せめてもの悪あがきとばかりに千鶴はともに投げ飛ばされた小太刀に手をのばすが、はるか遠くにあるため届かず、男に首を掴まれ、壁に叩きつけられる。

「う、あ……」

呼吸をする事がままらなくなり、意識が朦朧とする。

男はだらりと垂れ下がる千鶴の腕を掴み、狂喜の笑みを浮かべながらそれを自身の口元に運ぶ。

それを霞む視界の中で見つめる千鶴は、血を飲むんだろうな、と人事のように考える。

何の反抗もしない千鶴の腕に男が歯をたてようとした。

「――その時だった。」

胴着を着た長身の少年が自分と男の間に入り、千鶴の首を掴む男の腕を掴んだのは。

後ろ姿からでも伝わってくる、少年の殺気ともいえる気迫。

自分にあてられていないものと分かつてはいるものの、どこか恐怖を覚える。

しかし、少年の広い背中を見ると恐怖より安心感が上回り、思っていた以上に強張っていた身体の力が抜ける。
そのせいか、この状況にも関わらず、千鶴は意識を手放してしまっただった。

突然現れ、千鶴を助けた少年を見て薫は嫌悪と憎悪を覚えた。

少年は意識を失った千鶴を片腕で抱き、そのまま持っていた竹刀を男の喉に当てる。

普通なら少年の気迫の恐ろしさに腰が抜け、逃げ出すだろう。しかし、相手は自我を失い、血だけを求める鬼になった者。
その程度の脅迫で怯むはずがない。

男は自身の喉に当てられた竹刀を掴み、握り潰す。

驚いて少年は竹刀を引き、先の部分が無残にも潰された竹刀を見る。
これでは使い物にならない。

辺りを見渡し、代わりになるものを探すが、そんな時間を与えさせまいという風に羅刹は襲い掛かる。

潰された竹刀でどうか応戦するものの、長くは持たない。

「沖田！！ これを使え！」

突然何かが投げ飛ばされ、反射的にそれ――小太刀を掴む。

飛んできた方向を見ると、自分が抱えている少女と似た顔立ちの少年。

「竹刀だけじゃ、そいつに勝てない！ それを使え！」

沖田は小太刀を握り締め、鞘を抜く。

一目でよく研がれている事が分かる銀色の刃に己の顔が映る。

顔に浮かぶ表情は男に対する恐怖など微塵もなく、ただ、笑みがあつた。

今は恐怖を感じてもおかしくない。しかし、恐怖というものは一欠片も感じないのだ。

あるのは純粹な歡喜。

本能が身体をつき動かす。

少女一人を抱えているとは思えない程、速く。

男の目の前まで踏み込み、小太刀を振り上げた。

「……あのまま、あの男を斬るのかと思つたわ」

「やだなあ、僕だつて、その辺りはちゃんとわきまえているよ」

あの時、沖田が小太刀を振り上げた時、男を斬るのかと思つた。

しかし彼は千の予想に反し、小太刀の刃を使うのではなく、柄を使い、相手の首に当て、氣を失わしたのだ。

ちなみに、男は縄で縛られ、同じように縄で縛られた五人の男女とともに会場の隅で氣を失っている。

「へえ、おまえでも、常識はわきまえてるんだな。……」

それより、いつまで千鶴を抱いているんだ」

沖田は自分の腕の中で眠る少女に目を落とす。

そういえば、あの時からずっと抱いていたままだった。

「返してほしい？」

「当たり前だ！」

吠え返す薫を見て、思案するように目を上に向ける。

「じゃあ、さ。あれが何なのか教えてくれたら返してあげるよ」

沖田は体育館の隅で氣を失っている六人の男女を指差す。

途端、空氣が変わり、千が慌てて口を開く。

「だから、あれは」

「藥物中毒……って感じじゃないよね。髪が白から黒に変わつてたし」

そもそも、力が半端なかったし、と付け足す沖田の目には疑問はなく、確信しかなかった。

彼は、何かに気づいている。

細かい詳細は分からないだろうが、大まかな事は気づいているだろう。

千と薫は一瞬、視線を交わす。

沈黙が流れる中、薫がおもむろに口を開いた。

「・・・・・・分かった」

その言葉に沖田は目を瞬かせ、薫を意外そうに見た。

「あっさり、だね。裏でもあるの？」

「ある訳ないだろ。向こうで話すから、ついて来い」

「ここでしないの？」

「今から、ここに一般人が来るんだ。聞かれたらまずい」

それだけ言い残すと薫は沖田を放って先に進む。

沖田は千鶴を床に横たわせ、薫のあとを追った。

羅刹の存在を人に知られてはならない。

もし知られてしまったら、記憶を消すか殺すかのどちらかを行わなければならない。

それが、鬼の掟だ。

裏路地から出てきた薫は疲れた、という風に肩を回す。

先程の一連の出来事に関しての記憶を消し、眠らせた沖田を外に放置し、家に帰るため足を動かす。

荷物を会場の方に忘れた事に気づき、面倒臭いと舌打ちをして元の道に戻るうとしたが、壁にもたれかかっている少女を見て足を止め、意外そうに軽く目を瞬く。

「千、千鶴とあいつらを連れて帰ったんじゃないのか？」

「遅れてきた二人に任せたわ。――――ちよつと気になる事が

あつたしね」

「気になる事？」

「ええ。――あなたにしては珍しい事をしたじゃない」
薫の眉がぴくりと動いた。

「……読んだのか。悪趣味な」

千は薫の軽蔑をこめて吐き捨てられた言葉に何の反応もせず、小さくを笑う。

千には人に自分の声を『伝える』能力がある。

それは近距離ならば俗に言う、テレパシー。長距離ならば、黒揚羽蝶を使つて相手に自分の声を伝える事ができる。

そしてもう一つ、千は『伝える』能力と対の能力である『聞く』能力を持っている。

聞く、といっても声には様々な種類がある。

物に宿る魂の声。

生物の声。

自然の声。

――そして、人の心の声。

「まさか、あなたが彼の記憶を取り戻す手伝いをするなんて、予想外だったわ」

「……俺だって、できる事ならやりたくなかった」

「?　じゃあ、どうして？」

「……あいつに貸しを作るのは嫌なんだよ」

らしいと言えはらしいが、予想外の理由に目が点になる。

そのまま薫は何も言わず、荷物を取りに行くために再び歩き始めた。不機嫌丸出しな薫の背中を見て、千は小さく吹き出し、肩を震わせた。

第五話（後書き）

バトルシーンはやっぱり難しいですね。
書くのに時間が掛かり、表現がむずい！
でも、バトルもの大好きだ！

ここで、少しお知らせです。

私そらは、受験生という大変小説が書きにくい状況にいます。
しかし、少しずつ書いていくつもりです。
長い目で見守ってくれると嬉しいです。

感想お待ちしております。
そらに書く源を！

閑話一

治癒の力を持つ千鶴の血は万能薬となる。

一滴でも飲めば、どんな怪我や病気でも治す事ができる。

だが、それは千鶴と同じ鬼のみ。ただの人が飲めば、薬は毒となつて身体を蝕み、死に至らせる。

鬼でも人でもない羅刹がそれを飲めば両者とは違う効果が出る。

それは、『羅刹となつた者を人に戻す』というもの。

ある白で統一された部屋で千鶴は自分の人差し指にナイフを当てる。ナイフを引くと小さな痛みとともに赤い血が流れ出る。

その血を目の前で眠っている女性の口元に垂らした。

女性の口元に垂れた血はゆっくりと唇を伝い、口の中へと流れていく。

途端、女性は痙攣し、黒い髪がゆっくりと白へと染まっていく。

「が……あ……あ……」

女性は自身の焼け付くような痛みがする喉を絞める。爪が食い込み、真っ白な枕に朱い斑点が点々とついていく。

千鶴は女性の手に自分の手を重ねた。

「大丈夫です。すぐに治まりますから。――だからこれ以上、自分を傷つけないでください」

千鶴の言葉通り、落ち着いてきたのか、女性は首からゆっくり手を離す。

白く染まった髪は再び黒へと戻っていく。

あとから聞こえてくる、女性の安らいだ息遣いに千鶴は胸を撫で下ろした。

これで、この女性は『鬼』から『人』に戻つただろう。

羅刹となつた後遺症で再び人の生活に戻る事は困難だろうが、それはこの女性次第だ。

女性の首に包帯を巻き終えた千鶴は他の、ある男の欲望のせいだ。

人』から『鬼』に変えられた羅刹を再び『人』に戻すべく、その部屋をあとにした。

学園内には大型の病院がある。

多くの生徒を抱えている鬼桜学園では、時に、実験中に失敗した生徒が爆発などを起こしたりと数多くの事故が起こるので、学園内にある医務室だけでは足りなくなり、急遽ここが造られたのだ。すれ違う看護師や医者をよく見ると、妙に若い者が半数を占めている。

彼らは医者や看護師志望の生徒達だ。この病院はそういった者達にとつてよい研修場になる。

そんな彼らの間には絶える事のない噂が一つ、ある。

それは、病院の渡り廊下で繋がれた立入禁止区域である離れについてだ。

野獣のような唸り声や悲痛な叫び声。そして、狂喜を纏った笑い声。それらの声が時折、離れから聞こえてくるのだ。

それを好奇心で気になった生徒が肝試し気分で入るのだが、そういった者達は決まって、一時的に行方不明になり、その時の記憶を失った状態で発見される。

なので、「謎の実験が行われている」や「何かを取り付いている」等といった噂が絶えない。

そんな魔の巣窟のような場所に千鶴はいた。

千鶴は清潔感がある、白だけで統一された廊下を一人、歩く。時折聞こえてくる様々な声に顔を歪ませる。

そして、ある扉の前で立ち止まり、扉を開けた。

中には六床のベットに眠る、六人の男女。

千鶴は今日、捕らえられた、その六人の男女を『人』に戻すためにその部屋に足を踏み入れた。

閑話一（後書き）

短く、グダグダ感が否めません。

感想お待ちしております。

そらに書く源を！

第六話

一日目が終了し、日が沈む頃、学園では全国各地から訪れた参加者に対し、歓迎会という名の祭が開催される。

その祭では屋台といった定番中の定番といったものは勿論のこと、パレードや芸能科の生徒達による一種のコンサートのようなもので催される。

かなり大規模なものだが、大人の力はほとんど借りず、鬼桜の生徒の力だけで行われているのが、鬼桜が人気な理由の一つかもしれない。

祭は学園の中での大通りのような場所を中心に行われる。

それに沿うようにいくつかの店やカフェなどが点々と店をかまえている。

そこにある、一軒のカフェに千鶴達三人はいた。

千鶴は店内を軽く見渡す。

よく通っているカフェだが、学園外の制服やハロウィン気分なのか、多種多様な衣装をしている生徒達で賑わっているので別のカフェに入ってしまった気がする。

興味津々で千鶴が店内を見ている一方で千と薫はどこか疲れた、という風な表情で椅子に座っていた。

「……お千ちゃん、薫……大丈夫？」

店内から目を離れた千鶴が二人を気遣うように話し掛ける。

「大丈夫……と言いたい所だけど、全然大丈夫じゃないわ」

机に伏しながら両腕でバツの形を作り、もう無理。動けない、という事を全身で表す千と黙ってはいるが染み出す不機嫌さから、千と同じ思いという事が分かる薫に千鶴は苦笑をこぼした。

この二人は先程まで祭の警備をしていた。

一見、優等生ばかりが通っている学園だと思われがちだが、実際は違う。人より秀でたものを持って生まれた代償なのか、ここに通う

者のほとんどが変人……もとい、大事なネジがとんでいたりする。

そのせいか、問題や事件が次から次へと起こる……というか起こすのだ。

そして、それを抑え、解決するのが生徒会だ。なんでも、この学園で一番偉いからという理不尽な理由から強制的に、そして全校生徒の支持を集めながら決まったのだ。……きちんとした警備員がいるにも関わらず。

ちなみに千鶴は今だに体調が優れていないのに参加しようとしたが、薫を筆頭とした全員から参加を止められ、渋々ながらこれを辞退している。

いくら優秀な生徒会でも、ほんの数名しかいない。この無駄に広くいつも以上に人が多く、盛り上がっている学園内を全て見回れる訳がない。それに、精神・体力ともに持たない。なので本職である警備員達にあとを任せ、やっとの事で彼らは今の貴重な休みを手に入れた。

そんな二人と合流した時、千鶴は一瞬屍を見た気がした。

そして、千の口から「この大会、来年からなくしてやる……」と怨念がこもっている言葉が出た事に対しては幻聴で済ませたい。

千鶴がオレンジジュースに口をつけようとした時、千が思い出したように顔をあげた。

「そういえば千鶴ちゃん、『彼ら』は、どうなったの？」

『彼ら』とは今日、会場を襲撃した羅刹達の事だろう。

あの後、彼らは気を失った千鶴とともに病院の離れに運ばれた。

一連の事態を收拾してすぐに祭の準備と警備に向かった千と薫が知るのとはそこまでだ。

「大丈夫。ちゃんと病院で眠っているよ」

千鶴の言葉に千は胸を撫で下ろした。――千鶴が言葉に含んだ二重の意味をきちんと理解したうえで、だ。

「そう、よかったわ。……で、どうして薫はこの話題を出

した途端、不機嫌になったのよ」

「・・・・・・・・・・別に」

「嘘ね」

「嘘だね」

千鶴と千が同時に否定する。

薫はコーヒーを飲みながら視線を横にやるが、じつと自分を見てくる少女二人に負けたのか、面倒そうに口を開いた。

「あいつらが勝手に勘違いして脱走したからだよ」

「・・・・・・・・・・どういう事？」

「だから、仕事を無駄に増やしたって事」

少し意外な答えに千鶴と千は首を傾げた。

なんというか、薫らしい理由ではない。

彼らは『ある男』のせいで羅刹にされたのだ。それを学園が保護したのだが、羅刹という力をここでも利用されると思ったのだろっ、彼らは病院からの脱走を図り、数日に渡る逃亡を繰り広げたのだ。

搜索に関しては学園に通う、生徒会以外の鬼に任せただが、もし、自分達もそれに参加するという事になるならば、薫は喜んで、彼らの搜索に参加するはずだ。・・・・・・・・・・ストレス発散という事を含めて。

「薫・・・・・・・・・・、熱でもあるの？」

「千鶴。それ、どういう意味？」

「え、えーと・・・・・・・・・・それは・・・・・・・・・・その・・・・・・・・・・」

自分と同じ顔の少年の視線から逃げるように目をさ迷わせ、続きの言葉を言おうとするが、見つからない。

そんな二人のやり取りを見ながら、千はなんとなく、薫が不機嫌な理由が分かった気がした。

もし、それが正解ならば、千はこう思う。

本当にシスコンだな、と今更と思える言葉を。

そろそろ双子の終わりが見えない会話を中断させ、他を見て回りた
いと千が思い始めた時、声を掛けられた。

千ではなく、千鶴に。

その相手―――彼らに三人は目を見開いた。

頭が、痛い。

まるで内側から殴られるような痛みに沖田は何度も倒れそうになるのを堪えながら歩く。

沖田はほんの少し前にどこぞの路地裏で目を覚ました。

それと同時に小さな痛みを頭に覚え、放っておくうちに今では意識を失いそうなくらいの痛みになった。

その痛みは沖田を何処かに誘うかのようにどんどん痛みを増していく。

明かりから遠ざかるような道を選び、歩いていたせいか、気づけば闇が覆う森の中を歩いていた。

「ど・・・こだよ・・・ここ・・・」

本当はこの時点で立ち止まるのが正しいのだろう。

だが、痛みがそれを許さない。

一度でも立ち止まろうものなら痛みが倍以上に膨れ上がる。

一步。また一步と痛みから逃げるように足を動かす。

だが、それは地面から飛び出した木の根によつて邪魔される。

悔しさを覚えながら立ち上がろうとした時、頭痛が引いていくのが分かった。

驚いて顔をあげると、辺りの光景を目にし、再び驚いた。

今は夜という時間帯。しかも森の中という人工の光がない場所だ。わずかな月光が目の中のそれを照らし出す。

そこには、森の一部を切り開いた場所と焼けた多数の家屋。

しかも、ここ数年という単位ではない。

数十年前・・・もしかしたら百を越えているかもしれない。

焼けた家屋に纏わり付くように生えた草や辺り一帯を覆いつくすよ

うに生えた草花がそれを思わせる。

だが、沖田が驚いたのは、目の前にあるそれではない。

「……………自分の感情にだ。」

言い表せない複雑な感情が自身の中で渦巻き、暴れだす。

その時、今まで以上の痛みが一つ、沖田を襲った。

「う……………あ……………」

地面に倒れ込み、痛みを堪えるが、痛みは容赦なく襲ってくる。

いつその事意識を手放そうかと思い始めた時、痛む頭の端でガサツと草を分ける音が聞こえた。

今、自分がいる場所は夜の森の中だ。熊や猪がいてもおかしくない。自分はここまで運が悪かったのか、と自嘲気味に笑みを浮かべる。

だが、近づいてきた気配に目を見開いた。予想に反し、相手は熊でも猪でもない。……………人間だ。

「おやおや、可哀相に。……………まったく、薰様も中途半端な事になさる」

哀れんでいるようで面白がっているような声から察するところ、どうやら男のようだ。

男は沖田の目の前まで近づく。男はしゃがむ事もせず、ただ見下ろすように沖田を見る。

沖田は顔をあげる気力もなく、視界に入る男のズボンの裾と白衣から、医者なのかと思った。

それならば、何もしないのはどういう事なのかと思うものの、痛みあまり、口に出す事は叶わない。

男はどこか考えるような素振りを見せると、懷から小瓶を取り出し、足元……………つまり、沖田の目の前に置いた。

「これを飲みなさい。なに、心配する事はない。ただの頭痛薬さ。……………私お勧めのね」

男は一つ笑みを浮かべると、白衣を翻し、その場から立ち去った。沖田はぼんやりとその小瓶を見る。

雲に隠されていた月が一瞬、顔を出す。

それによって、小瓶の中にある、紅く、血のような液体が照らし出される。

沖田はそれを見た途端、本能とも反射ともいえるものによってそれに手を伸ばした。

一瞬、何故か一人の女の子の悲しげな表情が頭を横切った。

第六話（後書き）

やっぱり、衝動で書いてしまいますね……。次からは本気で勉強しなくては。↑ダメ人間

少し、今回は沖田がひどい扱いになってしまつて、すいません。気づけば、薫は不機嫌ばかりですね。

しかも、沖田以外の新撰組あまり出てないし……。

感想お待ちしております。

そらに書く源を！

第七話

はらりと髪が肩にかかる。

結んでいた桃色の髪紐が地面に落ちる。

結びが緩かったのか、と思ったが、二つに千切れているところを見るとどうやら違うようだ。

元々古かったので、物の寿命というものが来たのだろう。

千鶴は落ちた紐を拾い、隣を歩く千にそれを見せる。

「・・・お千ちゃん、この子の最後の言葉、聞いてくれた？」

「ええ。――」『千鶴様の髪紐として使われた前世での数年間と現世での数年間、至福の一時でした』って。本当に満足そうだったわ」

物には大小と大きさがあるものの、一つ一つに魂が入っている。

だから物にも生と死があり、思い出という物がある。

きつと、この髪紐はどんなものよりも幸せな思い出を持ち、死を遂げただろう。

「そっか・・・」

千鶴は寂しそうに笑みを零し、千切れた髪紐をポケットの中にしまい込む。

顔をあげると、千が難しい顔で何かを考えているのを見て、首を傾げる。

「お千ちゃん、どうしたの？」

「この子、まだ魂が残っていたみたいで仕舞われる直前に一言、何かを呟いたのよ」

「・・・・・・おい」

「何を？」

「よく分からないけど、『気をつけて』って言ってたと思うわ」

「・・・・・・・・・・おい」

「『気をつけて』？ 一体、何を？」

「さあ。私もはつきりと聞き取れなかったから・・・でも、『物の勘』って結構当たるから、念のために気をつけた方がいいわ」

「・・・・・・・・・・おい」

「でも、何に気をつければいいのか分からないからなあ」

「それもそうなのよ・・・・・・・・・・ね」

千の顔が今、引き攣った。

その理由は鈍いと言われる千鶴ですらも分かる。

それは、後ろから黒いオーラを醸し出し、無言の牽制を二人に与える少年にあった。

「・・・・・・・・・・二人とも、俺の声、聞こえてるよな？」

妙に落ち着いた声色が怖い。

二人はゆっくりと後ろを振り向く。

そして、すぐに振り向いてしまった事を後悔した。

「・・・・・・・・・・そこには、黒い天使が笑みを浮かべていた。」

「二人とも、今がどこで、何をしている状況か分かっているよな？」

「・・・・・・・・・・あ」

「・・・・・・・・・・気付いていなかったのか」

すっかり忘れていましたという風に視線を彷徨わす二人にため息しか出てこない。

いつも抜けている千鶴と違い、普段しつかりしていると思われる千も意外な場面で抜けたりする時があるので、自分達が頭を悩ます原因の一つでもあったりする。

二人は口を噤み、何を気になるのか、時折後ろを振り向きながら前を歩く二人の少年を見る。

「ーーーーーあいつらが前を歩いてたおかげで、二人のさっきの会話はあいつらには聞こえてないよ」

薫の言葉に二人は胸を撫で下ろした。

先程の二人の会話はおかしな点ばかりだ。

おかしな子達、と思われればそれでいいのだが、下手に探られれば彼らの身の保証がない。

本当に聞こえていなくてよかった、と思わずにはいられない。

なんせ、目の前を歩く黒髪の少年の方は、前世での諜報で鍛えられた鋭さを持っているのだ。探られれば、檻ぼろ褌を出してしまうかもしれない。

歩が遅い三人を待つように、前を歩く二人が足を止めた。それに、薫が口を開く。

「藤堂さん、斉藤さん、すいません。人探しの最中に会話をしてしまつて……」

「いや、気にしないでくれ」

「そうそう、一君の言うとおり。俺達が付き合わせてるんだしさ。てかさ、二人つてやっぱ兄妹なんだな」

「どういう意味ですか？」

「やり取りがまったく同じなんだよ」

しみじみと言う少年――平助に薫は眉を寄せた。

どこか違和感がある言葉だ。

「――藤堂さんは妹に会った事が？」

「あれ、聞いてないか？俺を試合会場に連れてつてくれたのって彼女なんだよ」

「……へえ、そうなんですか」

薫は目を細め、視線を横に動かし千鶴を見る。

千鶴は肩を震わし、恐る恐る黒い笑みを称える薫を見る。

その目には「その事、俺、まったく聞いてないよ？」や「あとからきつちり話してもらうから」と語っているのは千鶴の気のせいではないだろう。

家に帰ってからくるであろう地獄を想像し、気が重くなる中、平助がじっと自分を見ている事に気付く。

「藤堂さん、どうかしましたか？」

「あ、や……ご、ごめん」

「……？」

平助は口ごもり、視線をあらぬ方向に動かしている。気のせいか、頬が赤い気がする。

そして、何故か千が微笑ましそうというか面白そうな顔で自分と平助を交互に見て、何故か薫の機嫌は急降下していき、何故か斉藤は横を向き、こちらをまったく見ようとしない。

千鶴は首を傾げ、考える。

そして、唯一思い浮んだのは、

「藤堂さん、熱があるんですか？」

これであつた。

「いや、違うから！ 熱なんて全然ないから！」

全否定され、再び首を傾げる。

そして、何故か千に「千鶴ちゃん、それは違うわよ！」と怒った風に言われ、薫に「流石、俺の妹だ」といった目で見られ、斉藤は変わらず横を向いたままだった。

「あ、あのさ」

「はい、なんでしょうか」

「藤堂さんとか他人行儀な呼び方やめようぜ」

「え……」

顔が強張る。

—————重なる。

千鶴の様子に気付かず、平助は続ける。

「平助でいいよ。同い年だしさ」

「で、でも……」

「そんなに遠慮しないでいいって」

「わ、分かりました」

「敬語も禁止!」

「は、はい・・・・・・・・・・じゃなくて、う、うん」

平助は満足そうに頷き、再び歩きだす。

千鶴はその背を顔を歪め、眺めていた。

前世と重なる。

諦めていた感情が再び湧き出る。

一筋の涙が頬を伝った。

第七話（後書き）

閑話のような第七話でした。

もう少し書くつもりでしたが、第八話に持ち越します。

感想お待ちしております。

そらに書く源を！

第八話

二人に声を掛けられた時は本当に驚いた。

そして、あの時の薫の顔は本当に見物だったと千は思う。

二人が自分達に声を掛けた理由は、「人探しを手伝ってほしい」というものだった。

その相手は言うまでもなく、沖田総司だった。

断る理由もなく、逆に罪悪感もあったので、承諾した。・・・・・・

・ちなみに薫は珍しく反対はしなかったものの、渋々といった風だったのだが。

そうして沖田総司搜索が始まったのだ。

だが、搜索といっても千と千鶴を除いた全員が始めて十分もしない内に目的を二の次にして祭を楽しんでいる。

千が何故かと聞くと、全員が口を揃えて「あいつなら絶対大丈夫」と確信をこめて言うのだ。

なら、捜さなくていいと思うのだが、ここは彼らにしか分からない何かがあるのだろう。

そして今、搜索という目的はどこへ行つたのか、千鶴達は祭を満喫していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「斉藤さん、どうかしましたか？」

普段無表情の斉藤が眉を寄せ、険しい顔をしている事に気づき、千は声をかけた。

「いや、少々視線を感じてな」

「・・・・・・・・・・・・すいません」

恥ずかしそうに顔を俯け、謝る少女に斉藤は首を傾げる。

「何故、鈴鹿が謝る」

「・・・・・・・・・・・・多分それ、私達に原因があると思います」

千の言葉に斉藤は、ますます分からない、と首を傾げる。

千は自身の白いスカートをつまみ、少し持ち上げる。

「この制服って妙に悪目立ちするんですよ」

「……確か、白は鬼桜の中でも特に優秀な者を示すのだったな」

「ええ。……一般的には、ですけど」

最後に付け加えるようにして言った言葉は、斉藤の耳には届かず、周りの喧騒によって掻き消された。

鬼桜には白と黒の色違いの制服がある。

黒は一般的な生徒、白は優秀な者達が集まる鬼桜でも特に優秀な生徒だけが着る事が許される、というのが一般的に思われている事なのだが、開設当初はそういった目的ではなかった。

黒と白の違い……それは、『人』が『鬼』を見分けるためのものだった。

鬼桜学園は、国中に散らばっていた鬼を一カ所に集め、鬼を人の社会の中に溶け込ませる、という目的のために、国をも動かしながら造られた。……勿論、一般人には知らされず、内密にだが、いくら溶け込ませる、といっても、学園にいる間、人が『人』と『鬼』を見分けられなくては危険だ、という声があがった。そして、その方法が制服の色の違いとなったのだ。

当初は白と黒の制服の違いは区別するためのものだったのだが、鬼としての並外れた身体能力を目の当たりにした一般生徒が、「白の制服は特に優秀な生徒を指す」と誤解し、それがいつの間にか一般的な見解になったのだ。

祭がますます盛り上がって来た頃、ふと、斉藤と平助は聞き覚えのある声に呼び止められた。

「……あれ、斉藤と平助じゃねえか」

「さ、左之さん！？ ど、どうしてこんな所に」

自分達も多少なりとも驚いたものの、少し異常とも思える驚きの声をあげた平助に千鶴と千は首を傾げた。（ちなみに薫は興味が無い、といった顔で別の場所を見つめている。）

そして、斉藤を見ると普段の表情を通して、若干気まずそうな雰囲気醸し出しているのは自分達の気のせいではないだろう。

「酔い醒ましに歩いてたらおまえらを見つけたんだよ。――――
――二人とも、随分楽しそうだな」

「い、いや……これは……その……」

「……平助、諦めろ」

「一君は諦めるのが早過ぎだつて！」

これはいつそ、潔いともいえる。

原田は平助の肩に手を置き、同情をこめて口を開く。……
笑顔とともに。

「ま、平助。そういう事だ。――――という事で、仕事をサボ
ったおまえら二人には、一つ、仕事をしてもらおうか」

「……」

「そう警戒すんなつて。簡単な事だからさ」

「……それは一体？」

「酔い潰れた土方さんと新八の介抱」

「どこが簡単な事なんだよ！」

簡単どころか最初に頼まれた仕事より難易度が高くなっている。

行けば、絶対に暴れ、蹴られ、殴られるに決まっている。

それならば、土方の鬼メニユーをこなした方が断然いい。

隣では斉藤が諦めた様子で小さく息をはいている。……本
当に潔い。

二人の様子を（面白そうに）見ながら、原田は五人が進んできた方
向と逆方向の道を指す。

「ここ真っ直ぐ行って、他の店より妙に騒がしい所にいつから、行
つてこい」

「左之さんは？」

「……またあそこに戻るのには控えたい」

つまり、それだけ酷い惨状なのだろう。

平助は千鶴達を振り返る。

沖田は覚束ない足どりでどうにか宿泊棟にたどり着く。

一見質素に見える造りだが、よく見ると技術を詰め込んでいる事が分かる。聞けば、ここの生徒が建てたというのだから驚きだ。

自身の部屋に向かう途中で誰にもすれ違わないところを考えると、この宿泊棟に泊まる参加者全員が祭の方に出ているのだろう。

そう思い、沖田は安堵の息を零した。

今、自分は壁にもたれかかりながらやつの事で進んでいる状態だ。こんな弱った姿を誰にも見られたくない。そういった、自身の矜持^{プライド}がそう思わせる。

自身の部屋に着き、扉にもたれ掛かるようにして開く。

中は暗かったが、電気はつけず、漏れ入ってくる祭の光を頼りにベットの近くまで行く。

そして、そのまま倒れ込んだ。

部屋に着いた事で気が緩んだのか、治まっていたはずの痛みが再び頭を走る。

頭を押さえ込み、痛みが弱まっていくのを待つ。

その効果あつてか、少しずつ痛みが引いていくのを感じながら沖田は思い出したかのように自身の懐を探る。

目的のものを探り当てたのか、それを取り出す。

祭から漏れた光によってそれが照らされた。

小瓶の中に入っている、血のような紅い液体が光を反射し鈍く輝く。

あの時、自分は得体が分からない、この液体を躊躇いもなく飲むとした。

だが、一瞬湧き出た罪悪感のような躊躇がそれを留めたのだ。

沖田はその小瓶を手で包むように握りしめる。

「……何が起こってるんだよ」

苛立ちから乱暴にそれを吐き捨ると同時に、まるでそれに答えるように唐突に増した痛みによって沖田は意識を手放した。

その日、沖田は酷く懐かしく、哀しい夢を見た。

第八話（後書き）

原田さん覚えていました！

最初はそういうつもりではなかったので、自分でもびっくりです。

そして、主人公。今回もまた、沖田との接触0。

本当に沖千か？ と最近自分でも疑問に思っています。

感想お待ちしております。

そらに書く源を！

第九話

人の流れを逆らって歩いていく内に、人通りが少なく、少し大人向けだと思われる飲食店が立ち並ぶ広場に出る。

その中で、他の落ち着いた店とは違い、妙に騒がしい一軒の居酒屋を見つけた。

最初は原田のおおざっぱな言葉に辿り着けるか不安を覚えたのだが、これならすぐ分かる。

「・・・・・・・・あそこか」

「だよな。ーーーーてかさ、なんで学園の中に居酒屋があるんだよ」

「辺りをよく見ろ」

平助の今更過ぎると思われる疑問に斉藤が淡々と返す。

確かに生徒の数が大半を占めており、学園の自営（学園内にある店の経営など）もほとんど生徒だけで行っている鬼桜ではこのような場所は不必要だと思われる。

だが、生徒が自営している、といっても教師や医者といった専門知識を必要とするものに関しては流石に無理だ。

なので、こういった場面では自然と大人も必要となってくる。

そして、教師といった職業を持つ者は生徒の多さに比例して多くなるものだ。

結果、莫大な生徒数を誇る鬼桜では他校とは比べものにならないくらい教師がいる事になる。

また、鬼桜は中々外に出られない事で有名だ。それは教師も例外ではない。

よって、教師の日頃の疲れを癒すためのこういった場所も必要になる。

斉藤の言う通りに辺りをよく見れば先程より大人の数が多い事が分かる。

それほどこの場所が大人達の癒しの場となっているのか分かるのだが、未成年が多い場所でこういった酒を出す店が多いのはどうかと思う。

場所が場所なので少々居心地の悪さを感じつつも、その妙に騒がしい店の前に立つ。

だが、入ろうとはしない。

自分達は今、酒を飲むのは数年早い未成年だ。

なので、酒を専門として扱う店に大人なしで入るのはどうしても躊躇ってしまふ。

そしてもう一つ、躊躇う理由がある。

「島原」

という和風造りの外装とは不釣り合いな少し可愛く書かれた文字が入った看板を目にしたからだ。

そんな、京都に昔あった遊郭の名前を使うな、と思わずにはいられない。

「・・・・・・・・・・一君、これ・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・入るぞ」

「決断早いつて！」

斉藤は引き戸に手をかける一瞬、躊躇ったものの、決心するが早い。躊躇なく開いた。

ここは学園内だ。だから、きっと、中は普通の居酒屋だ。（いや、ある時点でどうかと）

二人はそう思った。

そして、中を見る。

・・・・・・・・・・いつそ、遊郭の方がよかったと思った。

中には永倉並に鍛えられた逞しい肉体を持つ、「おっさん」と呼ばれる年齢の人々でひしめき合っていた。

「左之さんが再びここに戻りたくなかった理由って・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・間違いなくこれが原因だな」

はめられた、と思わずにはいられない。

「ーーーーーにしても意外だな」

「何が？」

臭いに酔ったのか、光景に酔ったのか、平助がげっそりとした顔で聞き返す。

「まさか平助が島原という言葉を知っていたとはな」

「ああ、それはーーーー・・・・・・・・」

言葉が、続かなかった。

斉藤の言葉で初めて気づく。

自分自身、「島原」という言葉を聞くのは初めてだと。

もしかしたら今まで、一度くらいは聞いたのかもしれない。

だが、そんな類たぐいのものではない。

ずつと使っていた言葉のようにすんなりと出てきたのだ。

「平助、どうかしたか？」

「な、なんでもない！ それより早く先生達捜そうぜ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

訝しげにこちらを見るものの、平助の言の方が正しいと判断したのか「行くぞ」と一言だけ言つと、人でひしめき合う中を躊躇いなく入っていく。

平助も怖じけづきながらもそのあとを追った。

「ーーーーーお、このコーヒー、うまいな」

「このオーナーは私の友達なんです。その子、コーヒーへのこだわりがすごくて」

「へえ・・・・・・・・てか、高校生がここ、経営してんのか？」

「はい。鬼桜では、ある過程を過ぎたら誰でも店を構える事ができますよ」

「それ、すげえな。高校生に店を任せるって・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・大人が少ないですから」

幼少時からここにいる千鶴から見ても、鬼桜のこのシステムはおかしく思う。

だが、他から見たら多すぎると思われる大人の数でも、敷地の広さと生徒数を考えるとあまりにも少ない。なので、こういったところまでは貴重な大人を割けない。そうしたら自然に、中にある設備などは生徒に任せられる事になる。

学園内を歩いていると、こういった喫茶店に限らず、映画館などの娯楽施設を生徒が経営しているのはよく見かける光景だ。

「・・・・・・・・・・ねえ、久々に会えた仲間と話するのが楽しいのは分かるんだけど、そろそろ本題に入っていいい？」

一緒にいる薫と千を忘れ、和気藹々と話していく原田と千鶴にそろそろ耐え切れなくなった千が口を開く。

「そっういや、そのためにここに来たんだけ」

「・・・・・・・・・・忘れないでよ」

呑気ともとれる原田の言動に脱力し、ため息を一つつき、気を取り直す。

「・・・・・・・・・・それでは、改めて聞きます。原田さんはいつ、記憶を取り戻されたのですか？」

原田は飲んでいたコーヒを机に置き、口を開く。・・・・・・・・何故か、苦渋の色が顔に浮かんでいた。

「・・・・・・・・・・一ヶ月くらい前にバス事故に遭ってな、その時に思い出したんだよ」

「・・・・・・・・・・え・・・・・・・・・・そんな、はずは・・・・・・・・・・」

千鶴は原田の言葉に思わず呟きを洩らす。

それが失言だと気づき、慌てて口を閉じる。

だが、時すでに遅し。

何かを感じていた原田が千鶴をじっと見ていた。

「千鶴。何か、隠してるよな」

「あ……う……」

有無を言わさない目から逃れるように目の前に座っている薫と千をちらりと見る。

それを受けとった薫は息を吐き、口を開いた。

「……………別にいいよ。言つて」

「う、うん。……で、ええ!？」

予想外の言葉に千鶴だけでなく、千も声をあげる。

「ちよつ、薫!？ 正気なの!？」

「やつぱり熱でもあるの!？」

「千鶴、まだそれを引きずっていたの? ……………千、正気も正気。こいつは思い出したからね」

薫は一旦言葉を切り、原田を笑みを浮かべながら見る。

「巻き込まなければならぬよ。絶対に、ね」

「……………なあ。それに俺の拒否権は?」

「聞こえなかった? 俺、絶対、つて言つたと思うけど」

つまり、ないという事なのだろう。

原田は息を吐き、楽しそうな笑みを浮かべる薫をちらりと見る。

先ほど、目の前にいる少年と千鶴は双子と言つ事を聞いた。

確かに外見はそっくりで双子なんだなあとは思つ。だが、中身はまったく違う。

「うつわあ、信じたくねえ……」

「……………結構傷つくんだけど」

どうして分かつたのか気になるところだが、色々と嫌な予感しかないで聞かないでおく。

「で、今から強制的に巻き込むけどいいよね?」

「強制的とか言いながら確認とるなよ。……………しょうがねえな、巻き込まれてやるよ」

「え、でも……」

内容を深く聞いてもないのに、そんなにあつさりと、と千鶴は原田に訴えかけるように見る。

原田はそんな千鶴に苦笑をこぼし、安心させるように手を千鶴の頭に置く。

「大丈夫だつて。これでもあの時代を生き抜いたんだからな」

千鶴は一瞬目を開き、懐かしむような笑みをこぼす。

「そう、ですよね」

原田はそんな千鶴に笑みを浮かべる。そしてすぐ、顔を引き締め、薫に向き直る。

「それじゃあ、話してくれるか？ おまえらの隠している事を」
顔つきが変わる。

それは現代だけを生き抜いた者では絶対につくれないもの。

薫はそれに薄く笑い、口を開いた。

第九話（後書き）

中途半端な終わり方ですいません。

会話ばかりなのは苦手なのだと、これを書いて初めて気づきました。

【お知らせ】

次の更新は来月の中旬くらいになると思います。

ちよっと・・・とういうか、かなり危険な状態になったので、

これを一旦、止めなくてはならなくなりました。

本当に申し訳ありません。

来月の更新時に見てくださると嬉しく思います。

感想お待ちしております。

そらに書く源を！

第十話

「……………」これが俺らの現状だ」

薫は一時間以上の説明を全て終え、渴いた喉を水で潤す。

店内は空調管理は完璧で寒くもなく、暑くもない。だが、薫の額にはじわりと汗が滲み出ていた。

周囲の騒がしさと違い、重く、妙な沈黙が千鶴達を包む。

千鶴は薫にハンカチを渡しながら原田を盗み見る。だが、目を覆い隠しているため、その表情は窺えない。

奇妙な沈黙が続く。

唯一聞こえてくるのは周りの騒ぎ。それはすぐ間近で起こっているはずなのに、遠く離れた場所で起こっているように思える。

身体が震え、自分でも気づかない内にスカートを強く握りしめた。

汗が頬を伝い、手に一滴、落ちる。

ふと、温かい何かの手の上に重なった。

驚いて顔を上げると、微笑む千の顔が映った。

「ほら、そんなに握りしめていると、スカート、皺くちやになっちゃうわよ？」

「……………あ」

ぱつと手を離すと手遅れになった皺くちやになったスカートの姿。引っ張ったりして、必死に皺を伸ばしてみる。

効果なし。

「明日、クリーニングにだそっか」

「う、うん」

替えの制服はあるから大丈夫だろう。

だが、この時期は制服がよく汚れる時期なので、少し困る。

こういう時、真っ白な制服は汚れや皺が目立つので困る。

無駄だと分かりながらも、もう一度皺を伸ばしてみながら、千鶴はぼつりと呟いた。

「ありがとう、お千ちゃん」

「ん？ 何のこと？」

千は笑って、そう言った。

千鶴もそれに釣られて笑った。

あの時、原田は、

『信じろ』

暗に、そう言ったのだ。

なのに、信じなかった。

いや、信じていた。

薫が話しを進め、原田の表情が曇り、険しいものになっていくのを見ている内に、衝動的な不安に駆られた。

それは、信じていないのと同意語。

皺くちやになったスカートがその証拠だ。

千のおかげで、やっとそれに気づいた。

千鶴は効果が引つ張っても結局効果が見られなかったスカートから手を離れた。

水を飲み干し、一呼吸おき、逃げていた目を再び原田に向けた。

「……………そろそろ考え、まとまった？」

一気に話したことで混乱しているだろうと、配慮し、間を置いていた薫が口を開いた。

考えがまとまったらしく、原田は顔を上げ、険しい目を向けた。

薫ではなく、千鶴に。

びくつと身体がはねた。

怖い。

それが率直な感想だった。

「……………か……………ろ……………が」

「え？」

「馬鹿野郎が！！」

「っ！！？」

頭に走った突然の鈍い痛み。

固く握られている原田の左手を見ると、それによって殴られたのだろう。

「なっ……！！」

一瞬絶句したのち、原田に襲い掛かろうとした薫を千が手で制す。

「落ち着きなさい、薫。興奮しすぎて瞳が朱みがかっているわよ？」

「どけ、千」

「たまには、きちんと人の話を聞いて欲しいわ……………」

話を聞かない薫に千は肩を竦めた。

薫は仲間内でも常識人の部類に入るだろう。

だが、千鶴の事になると時たま、他の者が驚く行動をする。

これは、一種の発作なのかもしれない、と千は思う。

「そろそろ妹離れしないと、千鶴ちゃんに本気で嫌われるわよ？」

ぴくつと薫の肩が動いた。

よし、もう一押し。

「ほら、それならたまには見守ってあげましょう。千鶴ちゃんに嫌われたくないものね」

二度目の『嫌われる』が効いたのか、複雑そうな面持ちだが、薫は渋々引き下がった。

よし、勝った。

小さく笑むとそれに気づいた薫によってすごい目で睨まれたが、とりあえず無視し、千は千鶴と原田に目を向けた。

隣で千と薫が何かを言い合っている。

時たま、自分の名前が聞こえてくるので、すごく気になる。

だが、目の前にいる相手から目を離す余裕など、ない。

蛇に睨まれた蛙、とはこのことなのだろうか。

目を離す余裕もなく、動作一つする余裕もない。

もし、動けば――――喰われる。

ごくりと唾を飲み込んだ。

先程、水を一気に飲んだはずなのに、喉がからからに乾いている。背景に蛇と蛙の幻影が見える中、先に口を開いたのは原田だった。

「……千鶴、ありがとうな」

「……え？」

突然の感謝の言葉に緊張で張り詰めていた分、一気に気が抜ける。

「突然殴って、悪かったな。でもな、俺の気持ちも分かって欲しい」

原田は自分の腹部に手を置いた。

それに千鶴は一瞬目を開くと、すぐに苦々しいものを思い出したかのように顔を歪めた。

「おまえが、ここの傷を治してくれたんだってな」

「……」

薫は自分達が置かれている立場・現状からあのバス事故までを事細かに説明したのだ。

もちろん、千鶴が全員を治しきったことについても。

「おまえのおかげで俺はここにいる。感謝してもしきれねえ程だ。

うちの馬鹿共はなんも知らねえから、代わりに俺が礼を言う」

「い、いえ！ 別にそれほ」

「だがな、それはそれ、これはこれだ」

原田は千鶴の言葉を遮り、言った。

柔らかくなった目が再び険しさを帯びる。

隣で千との言い合いを終え、傍観者となっている薫を指した。

「こいつに聞くとこころ、おまえは治癒の力つてのを持ってるんだってな」

「は、はい」

「だが、それはかなりの危険リスクが伴うんだよな」

「・・・・・・・・はい」

一瞬の間ののち、答えた。

千鶴は鬼をも逸した、驚異的な治癒力を有している。だからこそ、人の傷を自らの身に移すという荒技ができるのだ。傷は移したら、すぐ治る。だが、痛みは別だ。

痛みは傷の大きさによって身体に残る時間が違う。

今回は今までにない程の怪我を治しきった。

その痛みは一か月以上たった今でも、癒えきらない。

最初よりかは良くなったが、長時間動くと身体のあらゆる部位が悲鳴をあげる。

今日はいつもより多く動いたので、きつと今、自分の顔色は青白くなっているだろう。

いつのまにか千鶴は原田から目を逸らしていた。

下げていた頭が、無骨で、大きいものによって優しく、撫でられた。懐かしいものが込み上げてくる。

それは、昔ーーーー今の『千鶴』が生まれてくる前の世で目の前の彼が何度もしてくれたもの。

「おまえは頑張ってくれた。だが、な。俺にとつちや、そんなん嬉しくもなるともねえ」

「ごめ・・・・・・・・な・・・・・・・・さ」

「だから、これからはそんな無茶をすんな」

「は・・・・・・・・い・・・・・・・・」

優しく、気遣う、その言葉、行動に今まで耐えてきた涙が零れ落ちた。

あの後、千鶴は今までにない程に泣いた。

それはもう、わんわんと。

そのおかげが、かなりすっきりとした気分だ。

真つ赤に腫れあがった目元に水で濡らしたハンカチをあてながら、千鶴はピークが過ぎ、片づけをし始めた祭りの中を一人、歩いてた。その後、千鶴が落ち着くの見計らい、解散となった。

原田は教師という立場があるため、そろそろ戻らなければいけなくなり、千と薫は生徒会の立場で祭りの片づけをしなくてはならなくなつたからだ。

千鶴も生徒会なのだが、今日一回、倒れた事と顔色が悪い事から、三人から休むように有無を言わさない言葉で言われたのだ。

そのため、渋々寮の方に戻らなくてはならなくなつた。……のはずなのに、千鶴は今、寮とは反対方向の道を歩いていた。

歩く内に人気はなくなり、街灯も少なくなつていく。

とうとう、建物という建物は見当たらなくなり、辺りは木々と一寸先も見えない暗闇だけになつた。

その中を千鶴は躊躇いなく、慣れた様子で歩いて行く。

歩いて行くと、木々がなくなり、開けた場所に出る。

千鶴の肩辺りまで伸びた草花の隙間から焼けた家屋が多数見える。

その内の一つに、千鶴は歩み寄つた。

その家屋を指先でそつと触れた。

二度、『人』によつて焼かれた、前世の自分が生まれ、最後を遂げた居場所であり、あの人を目の前で失つた場所。

悲しく、苦々しくも、懐かしい。

今まで、あまり近寄らなかつたが、今日やっと、来る勇気を持てた。千鶴は家屋の上にゆっくりと倒れこみ、意識を手放した。

第十話（後書き）

お久しぶりです！

やっと書く事ができました。

書くのはやっぱり楽しいですね。

なんだか原田さんばっかり出てきてます。

平千の次は原千か……。

沖千、早く出てきて欲しい。

感想お待ちしております。

そらに書く源を！

閑話二

山の中で千鶴は同じような場所を何度も繰り返し歩いていた。上を見上げてみると、低かった太陽はすっかり高い所まで昇っている。

あの位置から察するところ、二刻ほど自分はこの状況下にいるだろう。

「ほんと、どこ行ったのかな……総司さん……」

千鶴は頼りなさ気にその名を呟いた。

事の始まりは朝餉の準備ができ、千鶴は夫である沖田を起こしに行った時までに遡る。

千鶴が起こしに行った時、床には彼の姿がなかった。

疑問には思ったが、彼なら大丈夫だろうと結論づけ、彼が帰ってくるまでのんびり待っていた。

だが、いくら待っても帰って来ず、さすがに心配になり、捜しに出た。

今、自分達がいるのは雪村の里という、外界から引き離された山奥だ。なので、慣れていない道を一つでも通るとすぐに迷ってしまう。だから、そう遠くには行っていないだろうと思った。が、すぐにそれは裏切られる事になった。

長く続いた事で最初は小さかった不安が次第には膨れ上がり、それに比例するように歩く速さを速める。

先程からよからぬ予想が頭を横切る。涙が浮かび上がり、視界が霞む。

千鶴は予想を振り払うように頭を振り、自分の頬を何度も何度も叩いた。

「何、弱気になっているんだろう」

彼を何があっても信じる、そう誓った。だから、心配する要素など一つもない。

「よし!!」

袂で涙を拭い、歩を進める。

木々をかぎ分け、奥へ奥へと進む。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ」

木々によつて陰りができた所で見つけた。

ホツと胸を撫で下ろす。

一安心したところでちよつとした悪戯心が湧き出た。

こんなに捜し回ったのだ。少々驚かしてもばちは当たらない。

自分に背を向け、しゃがみ、何かをしている沖田に足音をたてないよう、ゆっくり近づく。

大きな声を出そうと息を深く吸い込んだ。

が。

「ねえ、千鶴。僕の後ろで何、やってるの？」

「・・・・・・・・・・え？」

沖田はゆっくりと後ろを振り向き、笑顔を千鶴に向ける。

千鶴はそれに顔が引き攣った。

千鶴は知っている。それは、悪戯を思い浮かんだ時の顔だと。

「もしかして、僕を驚かそうとした？」

「え・・・・・・・・あ・・・・・・・・う」

口ごもる千鶴に沖田はますます笑みを深いものにする。

（黒い）笑顔と沈黙の攻防戦が続く。

だが、それは唐突に終わりを告げた。

きゅるるるうう

という、可愛らしくも何とも気が抜ける音によって。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぶっ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・っ!!」

千鶴は顔を真っ赤にし、腹を隠す。

だが、それは功を成さず、腹は再び鳴り、千鶴はますます顔を赤くし、沖田は堪えていた笑いを我慢できず、腹を抱えた。

一通り笑った後、沖田は出てきた涙を指で拭いた。

「そういえば、朝餉まだだったね。もしかして、食わずに捜しに来てくれた？」

「もちろんです。心配したんですよ？」

「ごめんね、思ってたより時間がかっちゃってさ」

沖田は立ち上がり、袴についた土を払う。

「あー、結構汚れてるなあ。帰ったら着替えないと」

自分の袴をつまみ、そう呟く沖田に千鶴は控えめに声をかけた。

「あの、総司さん。一体何をしていたのですか？」

そう問うと、沖田は何かを考える素振りを見せ、口を開いた。

「んー、『友との別れ』、かな」

「友、ですか？」

「うん。ずっと一緒だったね」

「？」

ますます分からない。

首を傾げ、深く考え込むが、パンパンという手を打つ音によって遮られる。

「この話はこれでおしまい。ねえ、千鶴。お腹、空いたよね」

先程の出来事を思い出し、頬に熱が溜まる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ、は・・・・・・・・い」

「それじゃ、早く戻ろっか」

顔を赤くしたまま、頷く。

それを見た沖田は面白そうな笑みを作り、千鶴のもとに歩み寄った。

「あれ？」

「ん？ どうしたの、千鶴。僕の顔をじっと見て」

「あ、いえ。何でもありません」

彼の横顔が一瞬、寂しげな色を帯びていた気がした。

だが、それはほんの一瞬の事。気のせいだろう。

「千鶴ー？」

いつの間にか先に行っている沖田に名を呼ばれ、はっとし、慌ててその後を追う。

追うほんの少し前に、沖田がいた場所を一瞬、見た。

そこには、自分の腰ぐらゐの高さの岩が置かれ、掘り返した跡があった。

閑話二（後書き）

第十話より先に完成間近だった閑話二です。

少し、分かりにくいですが、前世の話です。

やっと、沖千うちきよを書けて、嬉しいです！

感想お待ちしております。

そらに書く源を！

第十一話

頬を突かれた。

まだ眠りの世界にいたい千鶴は無意識にそれを払いのける。だが、すぐにまた突かれる。

何度かそれを繰り返すうちに流石に目が覚め、千鶴はのろのろと目を開けた。

「お・・・・・・・・せ・・・・・・・・ちゃ・・・・・・・・ん・・・・・・・・？」

「うん、そう」

呂律が回らないがしっかりとそう呟くと、頬杖をつき、自分を見下ろすように座る少女はにっこりと笑った。

いつも通りの笑顔。しかし、どうしてもそれが怖いと思った。

ぼやけていた視界が段々と焦点が定まり、それとともにはずきりと見えてきた千の姿に、千鶴は首を傾げた。

「・・・・・・・・・・？ どうして、鬼の姿してるの？」

「それは、自分が寝ている場所をよーーーーーーーく見てから言ってくれるかしら」

千の言葉に再び首を傾げ、千鶴は覚醒しない重い頭を動かす。

視界に入るのは、好き放題のびた草花や澄み切った青空。――

――そして、自分が寝ている、焼失した家屋。

理解した途端、頭は急に覚醒し、サツと顔が青ざめた。

自分は昨日、千達の厚意を無視し、この場所に足を向けた。

初めはすぐに帰ろうと思っていた。しかし、いつの間にか眠っていたらしい。

「理解してくれた？」

「・・・・・・・・・・はい」

「あなたが部屋にいなかったことで、薫が今、どんな状態なのか、という事も？」

「・・・・・・・・・・はい」

分かる。

彼女の顔を見たら彼にかけたであろう苦勞がよく分かる。

鬼桜の寮では四人一部屋が一般的なのだが、生徒会の者だけが一人部屋ずつ与えられる。

千達はきつと千鶴の体調を考慮して、今日まで千鶴の部屋に近づかなかつたのだらう。

そして様子を見に行くと中には千鶴の姿はなく、しかも昨夜に戻つた気配もない。

それに気付いた薫は半狂乱となり、視界に入つたものにあたり、自然といつも身近にいる千がそれを押さえつける役割を持つことになる。

「まったく、あなたは部屋にいないし、薫は暴れるし……………」
・ほんと、今日は厄日よ」

「ごめんなさい！」

千から醸し出される不穏な空気を察し、慌てて謝るが、何故か、千は落ち着くどころかますます不機嫌になっていく。

「……………千鶴ちゃん、少し立ってくれるかしら」

「え？」

「いいから、立って」

「う、うん」

言われるがままに立ち上がる。

まだ疲労は残っているものの、ここに来て久々にぐっすりと眠れたおかげで、体が軽く感じる。

制服についた埃を払い、千を振り返る。

「お千ちゃん。立ったけど、何をすればい……………」

振り向いた瞬間、一本の指が視界に入った。

指は千鶴の額を軽く突く。

「え？」

軽く突かれた。大した威力もない。そのはずなのに、千鶴の身体は後ろにぐらりと傾いた。

家屋の上に尻餅をつき、突然の事に呆然としている千鶴に千は顔をぐつと近づける。

「千鶴ちゃん。私は今、とても怒っているわ。それはどうして？」

「昨日、私が部屋に戻っていなかったから……？」

「ええ、そうよ。でも、それ以上に怒っている事があるわ」

「……？」

「分からない、って顔ね」

「……その通りです」

困惑する千鶴を見て、千は息を吐く。

「あのね、あの時の痛みはまだ癒えきれてないし、昨日一回倒れた。あなたが気づいていないだけで、あなたの身体にはかなりのダメージが残っているはず。――――な・の・に！」

千は千鶴の両頬をつまみ、思いつきり引張った。

「こんなところで一夜を明かすわ、無茶してあの六人以外を治すわ！」

「お、お千ちゃん、それ、知ってたの？」

「朝、君菊に詳しく聞かせてもらったわ」

「き、君菊さんに!？」

千の口から出てきた予想外の名前に目を丸くする。

千鶴は昨日、六人の羅刹を『人』にした。

最初、千と薫は猛反対したが、千鶴の堅固な姿勢と六人の羅刹化の進行が深刻なものになっていった事から、渋々承諾した。
なのに。

千鶴はその六人以外も『人』にしたのだ。

その事は自身と病院内の人しか知らないはずだ。もちろん、こうなる事は分かっていたので、全員には黙っているように言っていた。そのはずなのに、病院の人間でもない君菊に洩れたのだろうか。

「……昨日、あなたを病院に送ったの、君菊と天霧よ」

千鶴の心の内を読み取ったのか、千がそう呟く。

「あの二人、思ったより遠い場所にいたみたいで、全てが片付いた後に駆けつけてきたのよ」

二人の性格から考えて、遅れてきた詫びとして荒れてしまった会場を片付ける事から千鶴と六人を病院へ搬送する事まで、全てを引き受けただろう。

その二人が気絶し、しかも顔色が悪い千鶴を病院に送ったまま放ったらかし、という事は考えにくい。つまり、二人のどちらかが千鶴達を送り、そのままついていたのだろう。

「……………あれ？ 私が起きた時に君菊さん、いなかったよ？」

「君菊が席を外していた時にあなたが起きたのよ。君菊も、あなたが全てを終わらした後に知ったそうよ」

「……………見事なすれ違いだ。」

「そっか……………君菊さん達にお礼言わないと」

「うん、とても千鶴ちゃんらしくていいけど、それは今度にしてもらえる？」

「え、どうして？」

「……………さつきも言った通り、あなたの身体にはかなりのダメージが残っているわ。だから今日一日、休みなさい」

「でも、今日は……………」

「薄桜学園との再試合があるわね。でもダメ。絶対ダメ」

「私、まだ何も」

「言っただけでも分かるわ。薫も絶対……………いや、多分、見に来るより休んで欲しいと思っっているわ」

何故、最後の方が弱い口調になったのだろう。

先手を打つ（しかも全て凶星）千に何も言えなくなり、口を閉じる。

「いい？ 千鶴ちゃん。今日は何が何でも寝る事」

「……………分かりました」

千は満足そうに頷くと千鶴に手を差し伸べる。

「……………あ、言い忘れたけど原田さんが一言、言いたい事があるんだって」

という、笑顔とともに千鶴にとって、爆弾発言と思える言葉を言いながら。

「……………うじ、総司、いい加減起きろ」

「……………てっ」

頭を叩かれ、目をうつすらと開ける。

「……………あれ、一君？」

身を起こし、すぐ隣にいる幼馴染の姿を見て、首を傾げる。

「ねえ、一君。君、いつ髪切ったの？」

そう言くと、何故かタオルを顔面に投げつけられた。

それを寸前で受け止め、斉藤を睨む。

「何、すんのさ」

「寝惚けているからだ。いいから、さっさと顔を洗って着替えて来い」

「だからって、物を投げつけないでよ。君、本当、どっかの誰かさんに似てきたね」

「……………戯言はいい。さっさと行け」

肩を竦め、部屋に設置された洗面所に向かう。が、小さな痛みが頭を走り、足を止める。

それに目聡く気づいた斉藤が声をかける。

「どうかしたか？」

「いや、何でもないよ。気のせいだったみたい」

そっだ、気のせいだ。

沖田は頭を振り、自分に言い聞かせるように、心の中でもう一度、そう呟く。

きつと、先程見た、おかしい夢を今だ引きずっているのだ。だから、斉藤の髪が長い、と思い込んでしまったのだ。

だが、気のせいだと思った痛みはますます増し、沖田は思わず頭を押さえ、壁にもたれかかりながら、床に座り込んだ。

「総司!？」

「ああ、一君。大丈夫だから、大声出さないでくれる？ 外にいる人が驚くでしょ」

「そんな状態で何、ふざけた事を言っている。今すぐ先生方を呼んでくる。少し、待ってろ」

「いいから」

頑なにそう告げる沖田に、斉藤は眉を寄せる。

沖田の額には脂汗がびっしりと浮かび、顔が青白くなっている。どう見ても『大丈夫』という状態ではない。

「・・・・・・何故、拒む」

「嫌だから」

はつきりとしたその一言に、斉藤は小さく息を吐いた。

「分かった、誰にも言わない。だが、今日の試合には出るな」

「は？」

「そんな身体で、あの鬼桜に勝てる訳がない。先生方には上手く言っておくから今日は大人しくしておけ」

「ちよ、何勝手な事を・・・・・・」

沖田の言を無視し、斉藤は立ち上がり、入り口近くに置いていた荷物を掴み、出て行った。

残された沖田は、幼馴染の素早く、有無を言わせない行動に一人、呆然とした。

時計の針が『12』――つまり、正午を指した。

その時刻は剣道の再試合が始まる時刻。

千鶴はその時刻を確認すると、一つ息を吐き、テレビをつけた。流石に試合を見れない、というのは嫌なので、せめてもの譲歩とい

う事で、テレビを通して見る事が許された。

テレビだと観覧席より間近で見られるが、所詮、全ては画面の中の出来事。

本物には程遠い。

遠目でもいいから生の試合を見て、その場で薫を応援したかった。

全ては自分の行いのせいなのだが、思ってしまうものは仕方がない。本日何度目か分からないため息を吐く。それと同時にガサツという草が擦りあう音がし、伏せがちだった頭を上げた。

今、この場には誰もいない。

ここが個室、という事もあるが、メインイベントの二日目にわざわざ寮内に引きこもる者や学園の隅にある寮にわざわざ訪れる者などあまりいない。

そして、寮の真後ろは山だ。きっと動物が迷い込んで来てしまったのだろう。

もし、その動物が熊か何かだとしたら近づくべきではないのだろうが、どうしても気になり、千鶴はソファから降り、音がした方向の窓に近づき、恐る恐る外を見た。

「ーーーーー！！！」

叫びそうになった口を慌てて押さえ、目の前のものに目を見開いた。人だ。

動物でも寮生でもない。

背の高い、茶髪の少年だ。

少年はしきりに首を傾げ、辺りを見渡している。

「……………あ」

彼の翡翠色の瞳と目があった。

肩を震わせ、小さく一步、後退した。

だが、目は逸らさない。いや、逸らせないのだ。

「……………うじさ……………」

喉をこくりと鳴らし、後退した足を前へと進める。

窓に手を置き、小さく押す。

音を鳴らしながら窓がゆつくりと開いた。

窓越してはない、前世と変わらない彼の姿を見て、
一滴の涙ひとしずくが零れ落ちた。

第十一話（後書き）

今までで、一番長かった第十一話です。

そのせいか、グダグダ感が否めません……。

しかも、これを書いている時、スランプ状態。

第十一話はスランプ状態から抜け出すために一心不乱に書いたもの
といっても過言ではありません。

やっと、沖千らしきものが書く事ができました。

これから、横道にそれないよう、頑張っていきます！

感想お待ちしております。

そらに書く源を！

第十二話

喫煙者にとって、生徒が過半数を占める鬼桜学園は酷な場所だ。

学生の教育に良くないと、最初は住み込み教師のためにとそれなりにあつた喫煙所も今では片手の指の数で足りる程少なくなつた。

そして今現在、ただでさえ、鬼桜は通常の学校より教師が多く、喫煙所が足りなくなつていたのに、他校からの引率教師によつてますます足りなくなつた。

なので、この広い学園の中でやつとのことで見つけた喫煙所は喫煙者によつて溢れかえつていた。

「うつわ……」

原田はその場で呆然とそれらを眺め、顔が引き攣つた。

学園内では自室であつても規定された場所以外では喫煙ができない。それは教師専用の宿泊所でも同じで、昨日から一本も吸つていないので、そろそろ口元が寂しくなり、朝早くに宿泊所を出て、散歩がてらに喫煙所を探し回つた。

そしてやつと見つけたと思つたら、そこには狭い喫煙所に溢れかえる程いる、大の大人達がいた。

しかも全員が男。むさ苦しいにもほどがある。

だからといって、やつとのことで辿り着いたのに一本も吸わず帰るのは嫌だ。

手に持つている箱に目を落とし、どうしたものかと思案する。

「……煙草と精神のどちらを取ろうか。」

他から見ればくだらない事だが、本人にとっては一大事。

「……あなた、何やってんの？」

「ん？……あ……」

声の方を振り向くと昨日再会した少女の兄が訝しげにこちらを見ていた。

「こんな中途半端なところで立つてられると通行の迷惑なんだけど」

「す、すまねえ」

朝とはいえ、大会の二日目。人通りはそれなりに多い。慌てて端に移動し、壁にもたれ掛かる。

「えーと、薫だっけか？　こんな朝早くにどうしたんだよ」

「見ての通りだよ」

薫は少し両手を広げた。

薫は学校指定の制服ではなく、剣道着を身につけており、手には先端部分がどこか黒ずんだ竹刀が握られていた。

「ああ、朝練か。朝からご苦労だ……」

「見ての通り、違反者を（俺の個人的な趣味で地獄を見るまで）取り締まっていたとこだよ」

「分かるか！」

朝によく似合う爽やかな笑顔だが、先程の言葉にどこか黒さが滲み出ているのは原田の気のせいではないだろう。

この学園の生徒に同情をしながら竹刀の黒ずんだ部分が血でない事を祈った。

「……とまあ、それは九割方冗談で」

「それは冗談とは言わない」

「たまたま見つけたおまえに聞きたいことがある」

突っ込みを無視し、薫は先程の笑顔を張り付けたまま一枚のプリントを原田の目の前に差し出した。

「再試合の対戦表、だな」

「そう、対戦表」

「これがどうかし……」

プリントから顔を上げ、薫を見た。そして、すぐに逃げ出したい衝動が襲った。

目に映ったのは、先程より笑みを深め、背景に悪魔を従わせた薫の姿。

こんなに笑顔が怖いと思ったのは、変な薬を作る趣味を持つ、うちの保健医以来だ。

「ど、どこか気に入らなかつたところがあつたのか？」

衝動をぐつと堪え、声が上擦りつつも再度尋ねる。

「ああーーーー最っ高に、ね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あえて無言で通す。

「何故？」とは聞いてはいけない気がした。

言ったら、何かが終わる。前世で培った直感がそう告げる。

そんな原田の心情を知ってか知らずか、薫は口を開いた。

「なんで、俺の対戦相手が沖田じゃなくて斉藤になっているんだ」

「・・・・・・・・・・は？」

思わぬ言葉に、気構えていたぶん、気が抜ける。

（・・・・・・・・・・そういや・・・・）

昨夜、千が薫が一方的に沖田を敵視している、と言っていたことを思い出し、納得した。

一方的とはいえ、敵視している相手を倒せる機会を昨日までならず、今日も失ったのだ。不機嫌になるのも分かる。

「ああ。総司の奴、朝から体調が悪くってな、休ませたんだよ」

最も、本人は出たがっていたが土方と斉藤の手より無理矢理出場禁止にしたのだが。

それを聞いた薫は、目を瞬いたあと、何かを考えるように顎に手をのせた。

「・・・・・・・・・・もう少しあとにすればよかったか・・・・・・・・？」

「？ 何をだ？」

「なんでもない。こちらのことだ」

「そう、か」

気にするな、と手をひらひらと振る薫に首を傾げる。

気になるが、相手には相手の事情がある。深入りはしない方がいいだろう。

「ーーーーにしても、体調不良程度で休むなんて、沖田の奴、思ったより軟弱だね。おかげで沖田を無理矢理俺の対戦相手にした意

味がないじゃないか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今、もの凄く聞き捨てならないことを聞いた気がする。

「な、なあ。さっきの言葉、もっかい言ってくれねえか？」

「だから、『体調不良程度で休むなんて・・・・・・・・』」

「いや、そのあとだ」

「『おかげで沖田を無理矢理俺の対戦相手にした意味がない』？」

「そこだー!!」

「は？」

それがどうしたのかと首を傾げる薫に顔が引き攣った。

「それって、いいのか・・・・・・・・？」

鬼桜では白の制服を着る者――特に生徒会に属する者は権限が強いと聞く。

だが、いくら権限が強いからといって個人の独断でそのような非常識なことをしてしまっているのだろうか。

「いいもなにも・・・・・・・・ああ」

原田が何を指しているのかに気づき、合点のいった声をあげた。

「そういえば、これは外の世界では普通ではないことだったな」

この学園は『外』とは違う常識が学園の至る場所で成り立っている。

『外』の常識を持った者にとっては、学園内は建物だけではなく、学園のシステムにも驚くことが多いだろう。

だが、ここが鬼の為に造られた場所なので仕方がないとも思える。

鬼の為に、鬼を中心にしつつも、『人』を尊重し、『人』の中に少しずつ紛れていく。それがここなのだ。

「――ここじゃ、俺達、生徒会が言ったことは大体が罷り通る」

「無茶苦茶だな・・・・・・・・」

「まあ、それがこの『ルール』なんだ。そのまま受け止める」

「・・・・・・・・そうする」

元から規模やら設備やらが規格外だったのだ。よく考えれば、シス

テムも全く違うことがすぐ思いつく。

変に気にすると疲れるだけだ。

大きく息をつくと同時に、原田の鼻先を掠めるように黒い何かの下から上へと舞い上がった。

「・・・・・・・・・・蝶？」

黒揚羽蝶は原田と薫の頭上を何度か旋回すると、伸ばされた薫の腕に止まった。

『・・・・・・・・薫、前方にぐっすり眠っている千鶴ちゃんを確認したわ』

「うを！？ 蝶が喋った！？」

「千の能力だ。驚くな。耳元で騒ぐな。五月蠅い」

睨みと一緒に淡々とそう告げられ、口を閉じる。

『まだ、見るからに本調子じゃなさそうだから、今日一日、部屋に閉じ込めておいていいわよね？』

黒揚羽蝶は最後にもの凄く物騒な言葉を薫に伝え終わると、それ以降何も言わず薫の返事を待つかのようにその場から微動だにしない。つた。

「さっきのつて、千つて子の声だったよな・・・・・・・・つて薫！？ どうした！？」

薫の表情は、まるで能面のようだった。

目が半目になっていて、喜怒哀楽をまったく写さず、無だけを写していた。

正直、あの笑顔より怖い。

「本当にどうした！？ 薫！ しっかりしろ！！」

何度も前後左右に激しく揺する。

何度も、何度も。

「——————やめろ」

何度目かにして、小さく発せられた声に揺れがぴたりと止んだ。

「正気に戻ったか！？」

「・・・・・・・・流石にあれだけやられればな・・・・・・・・」

怨みのこもった声に口がひくりと引き攣る。

反応が全くなかったからとはいえ、流石にやりすぎたらしい。

「わ、悪かった……。でも、何があっただよ」

黒揚羽蝶の言葉から察するところ、千鶴に關することで間違いないだろう。

だが、そのことについての何が、薫をここまでのものにしたのだろうか。

「あの、馬鹿妹が……」

「千鶴が？」

「昨日、寮に戻ってなかったんだ……。！」
くしゃり。

無意識に持っていたたばこ箱を握り潰した。

薫が言った、昨日。

それは、あの話が終わったあとのことだろうか。

「……。なあ、薫。この蝶を通して千鶴に一言、伝えられるか？」

「……。ああ」

薫はそれ以上何も言わず、黒揚羽蝶を止まらせている腕を少し、持ち上げる。

原田は、黒揚羽蝶に顔を近づけ、低く、何の感情もこもっていない静かな声で一言、簡潔に告げた。

「千鶴。あとで覚えてろ」

第十二話（後書き）

2ヶ月ぶりの投稿・・・・・・・・。

すいません！

しかも内容も千が千鶴を見つけるちよつと前。
寄り道ばかりの作者で本当にすいません！

この調子ですが、ついてきていただけると嬉しいです。

内容の方なのですが・・・・

原田&薫のファンの皆様にももの凄く申し訳ない気持ちでいっぱいです。

今まででも十分そうなのですが、今回は一段と酷い・・・・・・・・。
でも、書いている身としては、すごく楽しい（↑おい）

感想お待ちしております。

そらに書く源を！

第十三話

自分は『偶然』そこにいた。

『偶然』、上を見上げると一人の少女と目が合った。

全て、『偶然』。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

控えめに調節していたはずのテレビの音量が大きく聞こえる。

テレビだけじゃない。時計の針の音、風邪に乗って聞こえてくる、大会の騒ぎ声。――――そして、自分の心臓の音。

あらゆる音がいつも以上に聞こえる。

それは、部屋が静かすぎるせいなのか。耳が冴えてしまっているせいなのか。

ふっと息を小さく吐く。

落ち着け、自分。

ぐるぐると様々な感情が渦巻く胸中に、そう、何度も唱える。

もう一度息を小さく吐き、俯きがちだった顔を少しあげ、視界の中心に映る少年を盗み見る。

記憶の中より少し幼さが残る顔立ちだが、テレビを熱心に見つめる翡翠の瞳や少年が動くと同時に柔らかく揺れる、癖のついた茶色の髪は、記憶の中に残る青年と何一つ変わらない。

見つめていると、少年はテレビから目はずし、こちらに顔を向けた。

目が合い、小さな緊張が走る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ねえ」

「な、ななんでしょうか！」

突然のことに、縮まっていた体をぴんっと伸ばし、上擦った声で返す。

沖田は細い目をますます細め、自分の位置と千鶴のいる位置を確認し、口を開いた。

「どうして、そんなに離れてるのかな？」

この、一人部屋としては無駄にだっ広い部屋の中で沖田が座っている場所は、テレビの前にあるソファアの上。千鶴が座っている場所は、ベットの上。

どう考えても離れ過ぎている。

「そ、それは……」

千鶴は宙に目をさ迷わせる。

これといって理由はない。

沖田がソファアの真ん中に座ったので、どこに座ろうか迷った結果がここなのだ。

強いていうなら、

「これが、適正距離だと思ったからです……」

これ以上近づいてしまったら、自分の心臓がもたないからだ。

「……それって、僕が危険人物ってこと？」

ちよつと傷ついたなあと呟く沖田に千鶴は慌てて首を振った。

「違います!!」

「じゃあ、何？」

「え？あ……えと……、そうではなくて……その……」

上手く言葉を伝えれず、しどろもどろな千鶴を見て、沖田は口元で浮かぶ笑みを千鶴に気づかれないよう口を手で覆い隠す。

「……面白い人を見つけた^{もの}。

沖田はわざとらしく盛大なため息をつき、確認するようにもう一度

問い直す。

「違うんだよ、ね？」

「はい！！」

力強く首肯する千鶴に、沖田はにっこりと笑って、自分の隣をぽんぽんと軽く叩く。

「なら、隣に来てくれるよね？」

「分かりました！！！！！！！！て、へ？」

勢いよく答えた後、違和感を感じ、首を傾げる。

何か、重大なことを無視して答えてしまった気がする。

先程の会話を頭の中で何度も繰り返し返す。

『それって僕が危険人物ってこと？』

『違います！！』

『違うんだよ、ね？』

『はい！！』

『ならーーーーー・・・・・・・・・・』

「隣に・・・・・・・・ええ！？」

その言葉を解さず勢いで思わず答えてしまった、数秒前の自分を呪いたい。

だが、既に遅い。

沖田を見ると、笑みを崩さず、千鶴を待ち構えている。

・・・・・・嵌められた。

結局はきちんと人の話を聞かなかった自分が悪いのだが、そう思わずにはいられない。

（ど、どうしよう・・・・・・）

了承の返事を返してしまった以上、選択肢は一つしかない。

だが、その選択を実行してしまうとーーーー色々ともない。

ふと、混乱している千鶴の耳にぷつと吹き出す音が聞こえた。
見ると、口元を押さえ、肩を震わせている沖田が目に入る。

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもないよ……っ」

少しおさまっていたようだが、再び笑いの波が押し寄せてきたのか、自分から顔を背け、肩を震わせている。

千鶴は首を傾げる。

何か、しただろうか。

こういった時は必ず自分が何かをした時だ。

だが、全く心当たりがない。

千鶴が思案している内に笑いが徐々におさまったのか、少し乱れた姿勢を正し、沖田は出てきた涙を指で拭った。

「君、面白いね」

そう、笑顔を向けられた。

柔らかく、どこか子供っぽく見える笑みだ。

「……っ」

それは、記憶の中のそれと重なった。

胸の内に何かが込み上げる。

とても優しく、温かなものだ。

千鶴の口元に自然と笑みが形作られる。

どうして、あんなに緊張していたのだろうか。

時々子供っぽい性格も、あの柔らかな笑顔も、何一つ変わってない。

「……き……す」

「ん？」

「今すぐ、行きます!!」

千鶴は勢いよく立ち上がる。

突然のことに驚く沖田に満面の笑顔を向けた。

わああ、と後方にあるテレビから歓声が沸いた。

どうやら、勝敗が決まったようだ。

「あ……………」

しまった。

顔を引き攣らせ、心の中で奮闘してくれた部員達に謝罪した。

……………まったく、見ていなかった。

せめて、どちらが勝ったのかだけでも知りたい。

「……………鬼桜だよ」

千鶴の心の内に答えるかのように、静かにそう呟かれた。

「うちの高校、そこそこ強いんだけど、ね……………」

流石、負け知らずと謳われる鬼桜だ。

今回の勝ち抜き戦、鬼桜は一人目からこちらの選手のほとんどを倒していった。

だが、こちらが平助に代わって、一気に形勢逆転した。

平助は後れを取り戻すかのように、怒涛のごとく敵をなぎ倒していった。

しかし、その勢いも鬼桜の選手が最後の一人になった時……………

終わった。

お互い、最後の一人となった。

展開が読めなくなった、異様な空気の中、二人は床を蹴り上げた。

ほぼ互角の試合だった。

双方ともに、最初は互いの力量を把握しようと軽い打ち合いだった。それから少し経ち、最初に仕掛けたのは、こちらの最後の一人である斉藤だった。

相手が少し隙を見せた瞬間を見逃さず、得意とする突きを打ち込んだ。が、相手は人とは思えぬ瞬発力でそれを避け、隙ができた斉藤の胸に竹刀を打ち込んだ。

「南雲薫、か」

目を細め、唇を舐める。

疲弊しきっていたとはいえ、部で三番手につく平助や自分と同等の

力を持つ斉藤を倒してしまった相手。

昨日、一目見て、鬼桜の中でも飛び抜けて腕がいいと思ったが、ここまで強いとは思わなかった。
小さくため息をつく。

「昨日、最後まで戦いたかったな」
じつに、残念だ。

今度、きちんと手合わせさせてほしいものだ。

ふと、千鶴に目を向ける。すると、そこには何故かぴしりと固まった千鶴がいた。

「あ、あの……」

「ん？」

「昨日の、薫の相手って……沖田さんだったんですか？」

「そうだけど？」

そう告げると、いきなり頭を下げられた。

「す、すみません！！私、薫しか応援していませんでした！」

「……は？」

「相手が、沖田さんだと知っていれば、ちゃんと応援したのに……
……！ どうして、薫もお千ちゃんも、部の皆さんも教えてくれなかったんだろう」

本気で悔しがる千鶴に目を点にする。

途端、笑いが込み上げてきた。

「敵を応援してどうするのさ」

雪村千鶴と名乗った彼女は自分にとって不思議な存在だ。

初対面の自分に対し、緊張の色は見せど、怖がることはなく、上辺の自分を見て媚びるようなこともない。

上辺の自分ではなく、ありのままの自分を見据え、くったいなく笑う。

気づいたら、自分もそれに釣られ、心を許した仲間にしが見せない、本当の笑顔で彼女に接していた。

本当に、不思議な少女だ。

今まで、こんな娘は自分の周りにはいなかった。

「本当に面白いよね。君ってさ」

「そう、ですか？」

よく分からない、と首を傾げる。

その仕草に笑みを零す。

この様子では、先程もどうして笑われているか分かっていないかもしれない。

体を伸ばし、少し固まった体をほぐす。

「あーあ。緊急事態なんて起こらなければ、最後まで……で……」

言葉がそこで途切れた。

緊急事態で、強制的に避難させられた事は覚えている。

だが、そこからの記憶がなかった。

思い出そうとしても、記憶に靄がかかり、思い出せない。

突然、テレビから叫び声上がり、思考がぷつりと切れる。

それは、先程からちらほらと聞こえる歓声ではなく、悲鳴だった。

二人は画面を驚いて見る。

画面には、何かから逃げ惑う人々の姿が映っていた。

「な、何……」

罵声や怒声、悲鳴に混じり、時折肉を引き裂くような音が聞こえる。

そして、それらに混じり、聞こえる甲高い笑い声。

嫌な予感が胸の内をよぎる。

額に汗が浮かび、画面を食入るように見つめる。

カメラに何かが当たり、画面が横転する。

その時、一瞬だけ見えた白い髪に紅い瞳。

自我を失い、人を狂い襲う、その姿は、

「ら……せ、つ……」

そう、口に名をだしたが、ありえない、と首を振る。

そんなはずはない。

この学園は何重もの嚴重な結界・警備下のもとにある。

内に保護されている羅刹が逃げ出すことはあれど、外から入り込むことはまずない。

昨日の残りかと思っただがすぐにその考えは取り払われた。

混沌とした中でほんの一瞬だけ画面に映された羅刹は数多いた。

内に保護されている羅刹を優に上回るほどの。

ガタン、と窓を叩くような音がし、何事かと振り向く。そして、画面に映った白い頭髪と同じものが目に入る。

そこから、ゆらりと一つの腕が持ち上がる。

次の瞬間、それは勢いよく振りおろされた。

第十三話（後書き）

やっと。

やっと、現代の沖千らしい沖千が書けました。

・・・グダグダだったけど。

書いていると、華鬼の転生ものを書きたいなあと思いました。
遠い未来で、書けたら書きたいです。

感想お待ちしております。
そらに書く源を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0293q/>

淡い記憶

2011年11月14日22時29分発行